
声だけを聴いて

ひずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声だけを聴いて

【Nコード】

N8906X

【作者名】

ひずる

【あらすじ】

桐野夏花は修学旅行で『女子から』ばかり告白されるイケメン女子。本人はうんざりしているのに、人気は上がるばかり。あまりのアプローチの多さに、ある日夏花は彼氏を作ることを決意する！

第1話（前書き）

覗いていただいております！
更新は遅いですが、楽しんで書いていきます！

第1話

「す、好きです」

出た、修学旅行お決まりのコレ。

みんなと一緒に6泊7日、毎日楽しいイベントに溢れる関西への旅行。

浮かれ気分になるのも当然なんだけど、旅行が始まって3日、さすがに8回目の告白ともなると気が滅入ってくる。

「ずっと桐野さんのこと好きだったの」

そのセリフ、昨日も聞いたとも言えずに曖昧にうん、と頷いた。

毎日毎日なぜ…。

正直もう勘弁ほしい。

お気持ち嬉しいのですが、よく考えて！

私は女なの！

なんで修学旅行で女子にはっかり8人も告白されなきゃいけないの？

1回目。

「桐野さんって、ほんとに彼氏にしたい」
なれませんか。

2回目。

「私でよければ、付き合ってください！」
「いやいやいや、あなたがどつこのつこの問題じゃなくて！」

3回目。

「女だつていいの！」

私はよくないっ！

4回目。

「私だけを見てほしいの」
見れませんから。

5回目。

「…す…す…す…すき…すき…なんです」
何回『す』つて言つか数えちゃったよ！

6回目。

「お試してもいいから！せめて、修学旅行の間だけは私の彼氏になつて？」

試せるか！だから彼氏になれないって！女！

7回目。

「あたし、勇気を出して告白したの…」

あ、ありがとう…まあ、7人目んだけどね。

そして8回目。

私が「ごめんなさい」と謝ると、彼女は手のひらで顔を覆って泣き出してしまった。

ああ、こうなると慰めなきゃならない。

もう夜の11時半。

1日大阪を回った私たち5人はくたくたで、呼び出しを食らった私以外の班員はさつさと寝てしまった。

私だつて早く寝たいのに。

もう、どうすればいい？

誰でもいいから助けて！！

心の叫びは届かず、結局彼女を慰めてから2時に布団に潜り込むことになった。

ああ、ついてない…。

第1話（後書き）

どんな子なんだ桐野！？
詳しくは第2話で

第2話

修学旅行の壮絶な日々を思い出しながら、私は放課後に校舎の屋上で紙パックのジュースをちびちび飲んでいた。

10月も半ばを過ぎ、さすがにブラウスにスカートだけじゃ肌寒く感じて軽く手を擦りあわせる。

私の名前は桐野夏花^{きりの なつか}。9月に誕生日を向かえたばかり、17歳になりたての高校2年生！

得意科目は英語と体育、苦手科目は社会。

部活は帰宅部で…自称エースです。

そんなごくごく一般的な私の悩み、それは『女子に恐ろしくモテること』。

男子じゃなくて、女子。

…なんで？

人によく聞かれるけど、私が教えてほしいくらいだから！

好かれるのは嬉しいけど、本気は困る。

「ナツがかっこいいからよ」

いつものように頭を抱えて悩んでいたらしく、状況を察した友人が言った。

「モテる理由、簡単でしょ？身長は175オーバー、スポーツはなんでもこいだし、細身でスタイリッシュ。ちよっと切れ長の目にスツとした鼻筋！髪の毛はうらやましいくらいサラツサラだし、なにもしてないくせにちよっと茶髪っぽくってかっこいいからよ」

それに、と友人は続けた。

「女の子には基本的に優しくて、いわゆる乙女心もわかってくれて

そこら辺の男子よりいいに決まってる」

「あ、ありがとう…」

「ほめてないわよ」

「うっ…」

今川春花はいまがわはるかふいと横を向いて、紙パックのジュースを一気に飲みする。春花とは中学校からずっと一緒の親友。

中3のときは『春花・夏花コンビ』と呼ばれていた。

女子にばかりモテる私と違って、春花は男子によくモテる。

色白の肌にはつちりした目とか、ゆるくパーマのかかった髪とか、とにかく至るところが女子感であふれていて、女の私でも惚れそうなくらい可愛い！

なのに、春花は恐ろしいくらい毒舌。

さらっとひどいことを言うし、特に私の髪の色がうらやましいらしく、絶対に一言一言皮肉を混ぜてくる。

でも、それも可愛いから許してしまう。

これがギャップ萌えっていうのかなあ。

「またバカなこと考えてない？」

「な、ないない！」

ならいいけど、と言って春花は顔を上げ、空を仰いだ。

こんな何気ない仕草も様になる。

「ところで、結局何人からコクられたの？」

「え？」

「修学旅行よ、この前の」

空を仰いだまま訊かれた春花の質問に少しだけたじろいだ。

そっぴいえば結局何人だっけ。

忘れた訳じゃないけど、怖くて数えてなかった。

「8? いやウソウソ! えーと、10かな?」

「はあ、あいかわらずモテるのね、女子に」

「じよ、女子にっつて言っつなー!」

「違うの?」

「いや…まあほんとですが…」

いいわね、と呟いて春花はくるりと体を回転させた。

右手には空の紙パック。

もう話すことはないとはかりに、すたすたと校舎の入り口まで歩いて行った。

「ま、待って!」

私もあわてて残りのジュースを飲み干し、後を追った。

152cmと小柄な春花は1歩も小さい。

すぐに追いつくと、入り口のドアを開けてあげる。

「それよ、それ。そういう紳士的なことをするのがモテる原因なの」

そう言いながらも、春花は当たり前のように開けられたドアから中に入り、先に階段を降りていく。

「別に女子にだからやってるわけじゃないよ? 昔からよくやってたし」

「それがおかしいの。今だから言っつけどね、おばさん、ナツの教育間違えたと思っつ」

「ええー?」

きつと冬くんの影響もあると思うけど、と言って春花は最後の1段をとばすと、先に3階に降り立った。

「じゃ、私図書館で勉強していくから」

「あ、うん。がんばって」

少し遅れて3階にたどり着いた私は、可愛らしく手を振る春花に向かって頷く。

お昼の時間は、放課後に屋上行きたい！行きたい！と言ってたくせに、自分が満足すればすぐに去っていく。

まるで黒猫みたいと思いつながら、春花の背中を見送った。

第2話（後書き）

冬くんってダレ？
次書きますっ！！

第3話

春花が図書館に行ったあと、私は1人で家に帰ることにした。放課後の校舎はちょっと寂しい。話し声もどこか遠くに聞こえて、そうではないのに自分が1人ぼっちのような気がしてしまう。こんなときに彼氏がいたら、笑い合って帰れるのかなあ。

彼氏、つまりは男性。

私の脳にすぐ浮かんだのは、以外にも弟の冬貴。違うよ！断じてブラコンじゃないっ！

フユはなんというか：私のタイプじゃないし。

弟の冬貴は私より3つ下の中学2年生。

そしてこれもまたモテる、女子に。

我が兄弟の共通点は『女子にモテる』ことだけかもしれない、と思うと、はあとため息が出た。

フユは生まれつき少し体が弱かった。そのせいもあり、また初めての弟にお姉さんゴコロをくすぐられた私は、彼のためにバリバリ働いた。

母に代わっておむつを替え、重い荷物は持ってあげた。もちろん「おねえちゃん」と呼ばれればすぐに駆けつけて、しょっちゅう熱を出す弟のためにコンビ二にアイスを買いに走った。

頭はあまりよくないから宿題の手伝いはできなかつたけど（しなくてよかった）、弟の健気な顔を見ると胸がキュンとした。

まあ今考えれば、都合のいいようにパシられてたっただけなんだけどね。

お陰でフユはすっかり甘え上手になって、今ではそれを男女間の交流に生かしているみたいだ。

フユは割と細身で華奢な男の子に育ち、姉と違ってほんわかな性格になった。女子からは「冬くん」愛称で、かわいい！守ってあげたい！男子像をちゃっかりゲットしている。我が弟ながらうらやましいやつなんです。

世の中は不公平だ。

だってフユは女の子だとしても絶対モテたし、私だって男だったなら今絶対彼女がいるはずだ。

なんで女なのに、女子にこんなに人気があるかわからない。ドアを開けたり、荷物を持ったり、全てフユにしてきたことの延長で、つまりみんな妹みたいなものなのに。

うだうだ考えるうちに家に着いてしまった。

カギを開けて中に入る。父ががんばって建てたマイホームの3階にある部屋に転がるようにして入ると、カバンを放り出して制服のままベットにダイブした。

「彼氏：つくろうかな」

家に1人なのをいいことに、声に出して呟いてみる。どうせ父は会社、母もスーパーに寄り道して帰るだろうし、フユも学校だ。

「彼氏：つくついたらどうなるかな？」

春花から噂で聞いたのだけれど、ついに夏花クラブというファンクラブができたらしい…。

女子って怖いと思いつつ、枕に顔を埋める。

セーラー服にしわがよりそうだけど、まあいっか。

「やっぱ、ほしいかも彼氏」

もうこれ以上（女子に）告白されるのはヤダ。
もうこれ以上（女子に）モテるのはヤダ。

もうこれ以上私のイケメン度を上げたって、男子にはモテない！

「決めた」

よし、彼氏をつくらう。こんな私だって、努力すればなんとか女子っぽくなるかもしれない。いつものダルダルジャージを封印して、ボーイッシュなパーカーやトレーナーも封印して、たまにはスカートでもはいてみよう。

ガチャリとカギの開く音がして、続いてスーパーの袋の音が聞こえる。母だ。

「ナツ？いるの？」

「うん、いるー」

顔を上げて答えて、私はまた枕に突っ伏した。なんだか眠い。そういえば、昨日は英語の予習が終わってなくて夜更かししたんだ。頭の中で彼氏ゲットの作戦を立てながらも、少しずつ意識が遠のくを感じる。

明日春花に訊いてみようかな。きっと何か言うだろうけど。毒舌だけど、あれでも意外に頼りになるんだ、春花は。

そこまで考えて一呼吸すると、私は完全に眠りの中に落ちていった。

第3話（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
感謝でいっぱいです。

ついに彼氏をつくることを決めたナツ！
キターー！

毎日更新できるようにがんばります

第4話

授業が早く終わる月曜日の放課後、我が校の自販機で最も高いドリ
ンク（170円！）『いちごバナナみるくオレ』と引き換えに、私
は春花が予備校に行くまでの1時間を勝ち取った。

教室で向かい合わせて座りオレを手渡した途端に春花はのどを鳴ら
して飲み出す。

「ちょ…速…！」

もう少し味わって飲んで！私は90円のジュースで我慢しているん
だから！

あまりにすぐ飲み終わってしまいそうなので、慌てて本題を切り出
した。

「ねえ、あのさ…。か、彼氏をつくるには、どうすればいい？」

すぐに見るくオレを飲むのどの音がピタッと止まる。ストローをく
わえたまま上目遣いでこちらを見る姿の春花もかわいい。

「彼氏になるには、どうすればいいかって？」

「違う…！」

「すぐできるわよ彼女。今度誰でもいいからドアを開けてあげて、
そのついでに愛の言葉を囁けばいいのよ。すぐできる、それでオー
ケー」

「だから違うって！話聞いてた？彼氏つ…く…る！面白がってるで
しょ…！」

そんなことないわよ、と言いつつニヤニヤして春花はまたみるくオ

レを飲み出した。

ただし、今度はゆっくりと。

よかった、話を聞いてくれる気になったみたい。

「で、本当に彼氏でいいの？」

安心してジュースを飲みかけていた私は、春花の真剣な声にゲホッとむせた。

「いいのってどういうこと!？」

「そのまんまだけど」

いいに決まってるじゃん!

もう女子から告白されるのはお腹いっぱい!

いいのっていうか、むしろ早く彼氏をつくりたいんだって。

こっくりと頷いた私を見て、やっぱりみるくオレを飲みながら春花は微笑んだ。

身近で見ると胸キュンな笑顔だー。

「いいわ、私にできることがあったら協力する。何だか楽しそうだし、ナツにドアを開けてもらうのは私だけで十分だしね」

し、師匠!後半何か聞こえたけど気のせい?

私だけで十分って言った?

ま、まあ協力してもらえるならかなり心強いことは確かだし、見逃すか。

「ありがとう!師匠!」

「いいえー。あ、でもどうやって彼氏をつくるのかってところは自

分で考えてね」

「ええ!?!」

春花は叫ぶ私を無視して最後のみるくオレを吸い込んだ。こくんと
のどが動いて、170円の高級ジュースがお腹の中に入っていく。

「だって分かるでしょ。好きな人ができる、コクる、はいカップル
完成!あ、答え言っちゃった」

「いや、まあうんそうだけど…」

それは知ってるんだけど。

問題はその最初の方。

「好きな人ってどうすればできるのかな…」

「はあ?うそ、ナツって今まで恋愛したことないの?」

「な、ない…」

ええ、信じられないと呟いて固まる春花。

その目の前で何もできない私。

だって本当だし。

「ナツ…」

「ん?」

「私、今まで散々ナツのことバカにしてきたけど、今ちょっと申し
訳ないって思ってる」

「え?」

さらっと失礼なこと言ったよ!

申し訳ないというか、どちらかというと哀れみが浮かんだ顔で彼女は私を見つめる。

「そっか、そうなんだ。ナツいい？」

「は、はいっ！」

「まず、落ち着いて回りを見るのよ。そうすれば女子以外の何かが見えるはず。うちのクラスにだってイケメンがいないわけじゃないわ。まずはよく見ることに。いい？」

「はいっ！！」

本当に理解したのか疑っているらしい春花は、身を乗り出して私の顔を覗き込んだ。

「それから、この人といったら楽しいとか、もっと話したい、一緒に帰りたいと思う人ができたら、私に報告して」

「そ、それが恋なの？」

その質問に、春花はイスに座り直しながら少し悩むと、

「時と場合によるわ」

とどっち付かずな返事をくれた。

時と場合って、どんな時なんだろう…。

「とにかくいい？もう予備校に行かなきゃならないから確認だけするわよ。さっき言ったみたいなのが現れたら？」

「春花に報告します！」

「そう、いい子ね」

まるで生徒と先生みたい。

ガタガタ音をさせて春花がイスから立ち上がる。重そうなカバンにはきつとテキストがいっぱい入っている。

「じゃ、行くね。それから…がんばってね？」

「うん…ありがとう。あ、春花！」

何？と出入り口で振り返った彼女に向かって私は右手を差し出した。

「みるくオレのゴミ捨てとくよ？」

ありがとうイケメン彼氏！と笑ってゴミを渡すと春花は軽やかに教室を出て行った。

第4話（後書き）

読んでくださってありがとうございます!!

意外とピュアなナツ…。

それに対していろいろありそうな春花…。

よかったらまた覗いてください

第5話

寒い。ホント寒い。

冷えきった教室で、私は手に息をハーツと吹きかけた。

11月も少し過ぎた教室にはそろそろ暖房がほしい。

若いから大丈夫だと見栄をはってないで、セーター着てくればよかった。

ちらりと前の方の席を確認すると、ちゃんとセーターを着こんだ春花が英語の文法問題に取り組んでいる。

「ナツだいじょぶ？私の上着貸すよ？」

腕をさすっていたのに気づいたのか、右隣の斉藤桜が声をかけてくれた。

くるくるに巻かれたセミロングの髪を揺らしながら、こちらを覗いてくる。

その瞳にこもる光に思わずたじろぐ。

何を隠そう、実は彼女には一度告白されたことがあるのだ。

「私、149つて背が小さいから…ずっと背の高い人に憧れてたの。初めは意識なんかしてなかったし、その身長がうらやましい！つてだけだったんだけど…」。

あの、私あんなに優しくしてもらったことなくて…ホラ！私が放課後に貧血起こしちゃったとき、荷物持ってお家まで送ってくれたり…。

そのときからいいなあ、こんな人が彼氏だったらいいなあって思っ

そうしたら気づいたら…ナツのこと好きになつてたの』

そう言われたのが去年の12月。

体育館裏に呼び出された上、ものすごく感情を込めて語られて正直ちよつと困つた。

なるべく傷つかないように断つたけど、やっぱり根に持つてた(？)らしい。

「だ、大丈夫だよ。ありがとう。お昼になったらジャージに着替えるねー」

だいたい、149cmしかない斉藤桜の上着を着れるわけがない。不可能だ。

それに、ジャージに着替えれば大丈夫。

そう。うちの学校は登校は制服だけど、学校に来てからは自由でジャージに着替えてもいい決まりになっている。

それでもジャージを着ている人はあまりいない。生地が厚くて暖かいけど、サツマイモみたいな紫に黄色のラインが入っているのでださい。

寒い日は制服のまま授業を受けるか、いつそ開き直つてジャージを着てぬくぬくするか、いつも心で揺れる。

でもなんだか、今日は異常に寒い。

もしかして風邪？

「ナツ？もしかして風邪？保健室行く？」

「う、ううん…大丈夫だから…」

「でも、顔色悪いよ？」

うう…結構しつこい…。

「どうした桐野？風邪か？」

「あ、いえ……」

「そうなんです先生！顔まっ青で！」

「さ、斉藤さん……」

先生が教科書を持ったまま振り返って、私の顔をじいっと見つめた。何だか気まずい……。しばらくしてから先生がうーんと唸った。

「そう言われれば、顔色悪いなあ」

「え、えーとそうですか？」

えへへと力なく笑う私に、見かねた春花が口を挟んだ。

「大丈夫です先生、ナツはいつもあんな顔ですから」

「つておいおい！」

全然フォローできてないんですけど！

「お、そうか」

え、それで納得なんですか先生？

「まあ、一応安静にしておけよ。ジャージの方が暖かいだろ、制服の上からでもいいから着ておきなさい」

「は、はい……」

じゃあ続きやるぞー、と言う声で授業が再開しホッした。

もう若くないのかな？ダサいけど、あとでジャージ着るしかないか。

第5話（後書き）

ここまで読んでくださって嬉しいです！

思ったより長くなりそうなので、続きは明日にします
次話ではついに彼が登場っ！

ああ、早く出したい…。

第6話

長い授業時間をやり過ごせば、お昼休みがやって来る。

大勢の生徒が購買と食堂に向かう中、私は急ぎ足でロッカーに行つた。

うちの学校のロッカーは、狭くなるからという理由で自分の教室にない。

ロッカーだけが立ち並ぶロッカールームがあつて、そこに全ての荷物を置けるようになってる。

ロッカールームが校舎の4階にあるということを除けば、快適なんだけどな。

ロッカーが大きいのは嬉しいけど、4階にあるといちいち行くのがすごく面倒だ。

でもこのまま寒いのは嫌だし、仕方ない。

私はロッカールームが一番近い階段を上がり、黒塗りの重い扉を開いた。

日当たりの悪い部屋のような、ちよつと湿っぽいにおい。

部屋の奥までずらりと並ぶロッカーは、それだけですごく圧迫感がある。

ガチャ

お目当てのロッカーを見つけ、扉を開けた。

えーと、ジャージは…。

あ、あれ？ない？

「あーっ！！」

そっだ！ジャージの上、春花に貸してたんだっ！

一昨日の体育は体育館の中でだったから、寒くなくて半袖で授業を受けたんだっ…。

あの紫ジャージは名前の刺繍がないから、誰に貸しても、借りてもバレない。

そのときたまたまジャージを忘れた春花に「貸して」「って言われて…。

すっかり忘れてた…。

がつくりと頂垂れる。

「返すの、次の体育の授業でいいよ」って言っちゃったし、今日絶対春花はジャージを持ってきていないよね。
どうしよう…。

「桐野？」

呼ばれてふと左を見ると、同じクラスの秋津修あきつ しゅうがいた。

「秋津だ。どうしたの？」

「いや、どうしたのはお前の方だろ。さっきの叫び声、びっくりして心臓止まるかと思った」

「あ、ごめん」

別にいいんだけど、と言って秋津は自分のロッカーを開けた。

ジャージをどうしようと考えながら、私は彼をちらりと盗み見る。背が高い。

175cm以上ある私から見ても、かなり高い。

正確に尋ねたことはないけど、たぶん185cmを越えてるんじゃないかな？

これは春花に聞いたことだけど、秋津も修学旅行のときには10人

以上にコクられたらしい。
あ、もちろん女子からね！

中学時代は野球をやっていたらしく、どちらかという体は筋肉質
なかんじ。

でも嫌なゴツさじゃない。学ランがよく似合うし、調理実習のとき
のエプロンもまあまあイケた。

勉強するときに黒縁の眼鏡をかけると、ちょっと知的になるのも人
気みたい。

「桐野…？俺に何かついてる？」

「あ、ついてない！ごめん！」

やばい、ついしつかり見てしまった。

私の悪いクセって、きれいな人がいると男女構わず見ちゃうことな
んだよね。

「あのさ」

顔を上げると、秋津と目が合った。

あ、意外とまつげ長いんだ。

「あのさ、俺一昨日体育あったんだよ」

「え、うん、知ってるけど」

同じクラスなんだから、当たり前だよ。
私もあったよ。

「で、ジャージ着たわけ」

「は、はあ……」

そりゃそうでしょ、体育ですから。

「寒いみたいだから、これ着て」

「はい？」

体育がありました。ジャージ着ました。

で、今度は私に着ると？

明らかに不審な顔をした私を見て、彼は慌てて言い訳をした。

「いや、そのときのままじゃないから！一昨日体育して、持ち帰って洗濯したて！だから、きれいだからこれ着なよ？」

「そ、そう言っつてよ！」

びっくりしたじゃん！

ちよっと汗かいたのかな？とか思っっちゃったじゃん！！

「あ、ごめんごめん」

笑いながら、秋津はジャージの上着を差し出した。

「いや、お借りするには……」

「いいよ。名前の刺繍ないから誰のかわからないと思うし。ま、桐野なら俺のジャージ着てもバレないかな？」

「なっ……！！」

「なんてなー冗談！」

豪快に笑うと秋津は私の腕にジャージを押しつけた。

「ホラ、ちゃんと持たないと落ちるぞ」

「ととと…！」

真剣な顔に戻った秋津に促され、思わずジャージをぎゅっと抱えてしまった。

それを見届けて微笑むと彼は、

「返すの、次の体育のときまででいいから。俺帰宅部だし、体育のとき以外は使わないから」

と言い残して、くるりと背を向けた。

私が一昨日春花に言ったものと同じセリフを言われた。

何だか変なかんじ。

ギイと音を立ててロッカールームのドアを開けて、大きな背中が出ていこうとする。

お礼、言わなきゃ。

「あ、秋津！」

廊下への一步を止めて、秋津が振り返った。

「ありがとう！」

少しだけきよとした顔をして、それから彼はとびきりの笑顔になった。

つられて私も、ちょっとだけ笑う。

「いいよ。斉藤も言ってたけど、やっぱり顔色悪いみたいだから、気になったんだ」

そう言い残して秋津は出ていった。

なんていい人なんだろう。

もう一度腕の中でぎゅっと抱いたジャージは、せっけんのいいにおいがした。

第6話（後書き）

いつもありがとうございます！

やっと出せた修くん

彼はきつと素敵な大人になると思います（笑）

明日はちょこつと閑話を入れちゃう予定です。
よかったら、また覗いてください！

閑話 ナツとフユ（前書き）

フユ視点でお送りします！

閑話 ナツとフユ

ねえちゃんはいつも僕に甘い。

体が弱いからっていうのもあるけど、なんというか…過保護。

ま、最近はずっと弱まったけど。

桐野冬貴きりの ふゆきはそっと笑って、右手に持つアイスクリームと、左手に持つスプーンを見比べた。

それはつい1時間ほど前のこと、学校から帰ってきて急にアイスが食べたくなくなった。

秋はお腹がすぐ季節だからね、自然の摂理、仕方ない。

だけど、今帰ってきたとこだし…。

コンビニまでチャリで5分、歩いて10分が。

「よし！」

と呟いて、僕は鞆の中から携帯を取り出した。ピッピッと慣れた操作をして、機械を耳にあてる。

トゥルルルル…トゥルルルル…ガチャ

「はいーフユ何？」

2コール目で、ねえちゃんこと桐野夏花きりの なつかが電話に出た。

周りがガヤガヤしている。

よかった、帰宅途中みたい。

「ねえちゃん今帰るとこ？」

「そう。何か用事？」

「アイスクリーム買ってきて！」

「え？」

「ア・イ・ス。帰りにコンビニに寄って、『COW』のミルク買ってきて。スプーンは家の使うからもらわなくていいよ」

「えーもうコンビニ過ぎちゃったよ？」

「戻って」

「ええっ!?!」

昔はすぐ買いに行ってくれたのに。

やっぱり最近ちょっと冷たい。

「大丈夫、お金はちゃんと払います」

「と、当然っ！今金欠なの！」

なかなか手強い。もう一押しか。

「ねえちゃん」

「ん？」

「ねえ、買ってきて？だめ？僕今日なんだか熱っぽくて、どうしてもアイス食べたいんだけど…」

「むむむ…」

「お願いしますー！」

精一杯しおらしい声で言えば、数秒の沈黙のあとわかった！と大きな声が聞こえた。

「コンビニで『COW』買ってくればいいんでしょう？わかったよー
行きますー！」

やった！！
楽しくなって、そのまま携帯を耳にあてていると遠い会話が聞こえる。

「どうしたの？戻るの？」

「そう、フユがアイス買ってきてー！って」

「ああ、冬くんの頼みね」

「笑わないでよ、春花！」

「あいかわらず甘いんだから」

そこまでで通話がぷつりと切れた。

思わず笑ってしまう。

何だかんだ言っても、やっぱりねえちゃんは僕に甘い。

まあ、そこがいいところなんだけど！

そして現在。

僕は部屋でベットに腰掛けながら、まったりとアイスを堪能していた。

ちよつと溶けかけているところも、よく冷えている部分と合わされば、またおいしい。

楽しんでいるところで、部屋の扉が開いた。

「フユ、体調は？」

「大丈夫、ありがと」

よく見ると、夏花も左手にアイスを持っている。

夏花は冬貴の視線に気づいて笑った。

「私も食べたくなくて、買ってきちゃった」

「何味？」

「フユと一緒」

その答えに満足して僕は再びスプーンを進める。
やっぱりミルク味で正解。

「それ食べたなら寝てなよ?」

それだけ言うと、ねえちゃんはドアを閉めて階段をトントンと降りていった。

やっぱり甘い。やっぱり優しい。

僕らは正反対だと思っ。

性格も、容姿も、利き手も。

でも、やっぱり兄弟だなと感じる。

アイスはミルク味が好きとか、数学が苦手とか、きんぴらごぼろのニンジンが嫌いとか。

探せば意外と共通点がある。

アイスを食べ終えて僕は満足げに息を吐いた。優しい優しいおねえちゃんの言いつけ通り、ちゃんと寝ようかな。

ゴミを捨ててベツトに潜り込む。

頭まで布団を被って、アイスを2個買うねえちゃんを想像するとちよっと笑えた。

閑話 ナツとフユ（後書き）

フユは意外と腹黒ですね（笑）
でも、根はいい子…なはず…！

明日は本編に戻ります

読んでくださってありがとうございます！

第7話 (前書き)

本編再開です。

第7話

あの日秋津にジャージを借りてぬくぬく授業を受けることができたものの、結局私は熱を出して次の日は学校を休んだ。

ちょうど休んだ日は金曜日だったから、土日は家で寝たきり状態で過ごした。

風邪なんて久しぶりで心細かったけど、いつも甘えっぱなしのフユが珍しく看病してくれてちょっと嬉しい。

そして、月曜日。

すっかり元通りに回復した私は、3日間たっぷり睡眠を取ったおかげで授業中に寝ることもなく、昼休みに学食でカレーを食べていた。

「しっかし、病み上がりによくカレーなんてかき込めるわね」

「好きだからね！好物に食べる時期は関係ナシ。あ、おはし落としましたよ？」

隣に座ろうとしていた女子がおはしを落としたので、拾って差し出す。

彼女はありがとうございます、と言いながらポツと頬を染めた。肩までで切り揃えた髪は毛先の方で内側にくるんとしている。まつげも長いし、肌は白いのにほっぺたが赤いからまるで林檎みたい。

ああ…かわいい…っ。

「ちょっと、見すぎ」

向かいに座っている春花が、雑炊風ごはんが人気の『中華セット』を食べながら声をかけた。

あ、またやってしまった！

「すみません！」

「あ、いえ…そんな…」

まだ見たいと駄々をこねる本能を押さえつけ、無理矢理カレーに視線を戻す。

よし、大丈夫！

「元気になったのはいいことだとして、1つ訊きたいことがあるんだけど」

「ふん、なんでもきひて」

「食べてから言え」

「ふぁい」

スプーンいっぱいにくつつたカレーを頬張って、もぐもぐと咀嚼する。

ああ、幸せ！

土日はおかゆかうどんしか食べられなくて辛かった。土曜日の桐野家の晩ごはんは好物のオムライスだったのに。

急に落ち込んでカレーを食べ始めた私に、怪訝な顔をした春花が問いかけた。

「カレーまずいの？」

「いや、おいしいよ？」

「あ、そう。ならいいけど。ねえナツ」

「なに？」

「訊こうと思ってたんだけど、この前着てたジャージの上着って誰かに借りたの？確か私まだ返してないはずだけど」

「あ、秋津に借りた！」

秋津？と繰り返す春花に向かって軽く頷いて、そのままスプーンを動かしながらちよつと焦った。

風邪回復で舞い上がったけど、そういえばジャージ返さなきゃ。火曜日の体育に秋津だけジャージの上着なしは避けないと！もう洗濯はしてあるから返すだけだし。

「そっか、秋津に借りたのね。びっくりしたー！私記憶がないうちに返してたのかと思った」

「ごめん」

「しかも結構ピッタリサイズだったから」

「え……」

カレーだけを見ていた私は、スプーンを止めて春花の顔を仰ぎ見る。そんな私の顔を見て彼女は楽しそうに笑った。

「なんてね、うそよ」

ちよつと！それ秋津にもやられたから！さすがに男物のLは大きいです！

「ナツは反応が面白いから、ついついからかいたくなるの」

「えーやめてよ！」

せめて素直だとか言って！

「あ、あの……」

2人で話していると右隣から声がかかった。

2人してそちらを見ると、目に飛び込んだのはさっきのかわいい子！やっぱり林檎のようなほっぺた。

だらだらと話す私たちより先に食べ終わったらしく、手には空のお皿が乗ったトレーを持っていた。

「あの、さっきは……」

5秒ほどの沈黙。そして息を吸う。

「おはしありがとございまして！あのっ、失礼ですが桐野さんですよね？」

「あ、はい……」

「私、1年の橋本雪枝はしもと ゆきえといいます！去年の文化祭で桐野さんが王子をされていた劇見ました！！あの、そのとき私この高校に入ろうって決意したんです！」

そこまで一息で言うと、雪枝は肩でふうと息をついて、小さく「かっこよかったあ」と呟いた。

あ、あの劇を見たんだ……。

お姫様がお城のパーティーの帰りにガラスの靴を忘れる某ロマンス物語。

去年の文化祭、劇をやるか決めちゃううちのクラスは、その物語の現代版をやるうー！ということになった。私は運悪くその王子役になってしまったのだ。

理由は簡単。

『男子と手を握り合うなら、ナツと握り合った方がいい！！』

こんなクレームが飛び交って初期王子役の男子は降板、代わって私が王子をすることになってしまった。

まあ、劇自体はうまくいったからいいんだけど。
ふと雪枝の方を見上げると、瞳がキラキラしている。
うーん、かわいい、確かにかわいいんだけど…。その憧れはやめてほしい。

「あ、ありがとう。きよ、去年のクラスのみんなも喜ぶよ」

「えっ、いやそんな、あつすみません！私ったら憧れの桐野さんと会えてつい…失礼します！」

とりあえず微笑んでお礼を言うと、彼女は林檎ほっぺをさらに真っ赤にして去って行ってしまった。

本当にあつという間だ。何がしたかったんだろう。

「すごいわね、彼女…雪枝ちゃんだったけ？」

「熱烈アプローチだな、桐野？」

「へ？」

突然入ってきた声に、なんともすっとんきょうな声を上げて後ろを見た。

「あ、秋津！」

「よ。風邪治った？」

「は、はい。お陰さまで…。あつ、ジャージ明日返すね！」

「ああ」

秋津も学食食べに来てたのかな？

手にはトレーを持っている。

「カレー」

「ん？」

「早く食べないと授業間に合わないぞ」
「あ、うん！」

時計を見る。え、もう13時!?
あと10分しかない!!

急いで残りのカレーを食べるため、置いていたスプーンを持った。

「それにしてもモテんだな、桐野」
「むあ!？」

それはそれは楽しそうに、秋津が笑った。
くそ、絶対こいつ人の不幸をツマミにするタイプだ!!

「ま、わからなくもないけど」
「え?」
「じゃあな、お先」

そう言つて秋津は返却口まで歩いていく。
なんなの今日…。私、「は?」とか「え?」しか言っていない気がする。

「じちそうさまっ!」

やっと食べ終わると、向かいで座ったままの春花のトレーも手に取る。

「持っていくね? ちょ、ちょっと、何ニヤニヤしてるの?」
「いや、別に? モテるなあと思って?」

春花は微笑みながら立ち上がり、私の後ろを付いてきた。

だからなんなの！女子にモテたって嬉しくないんだからね！！

私は膨れながら返却口に向かった。

第7話 (後書き)

毎日読んでくださる方も。そうでない方もありがとうございます

いつもよりちょっと長くなりましたが、秋津くんを出せて楽しいです！

明日も彼は登場します。どんどん彼の本性が明らかになっていく予定です！

どうなるのでしょうか…！？

第8話

「ジャージありがとうございました！」

火曜日の朝、教室に入って斜め前の席に秋津を見つけた私は、昨日家できれいに畳んだジャージを差し出した。

「あ、おはよう。ん？これ何？」

「おはよう。あ、これね、昨日お母さんが焼いたクッキー。甘いもの大丈夫？普通のやつとチョコチップ入りとあるんだけど」

ジャージを受け取りながら、秋津はオレンジの袋でかわいくラッピングされたクッキーをつまみ上げる。

「大丈夫！てか、お母さんが焼いたんだな、桐野じゃなくて」

「うっ…私おかしは食べる専門で」

確かにバレンタインいっぱいもらってるもんな、と彼に笑われて、苦い顔になる。

だって、おかし作りなんて繊細なこと性に合わない！！

昔は騙されてたけど、材料入れて混ぜるだけとか嘘だからね！

「ありがたくいただきます。体育のあとお腹空くから食べるよ」

「うん、うちのお母さんのクッキー絶品だから、期待してて！」

「おう！」

そのとき、教室のドアから「秋津ー！」と呼ぶ声が聞こえた。

そちらを見ると、隣のクラスの男子2人が手を降っている。茶色に染めた髪を揺らしながら、彼らはドアの方に軽く体重を預けて笑っ

ていた。

「秋津、マジで頼む！数学ピンチ！！」

「俺も！っていうか、数学だけじゃなく英語もちょーピンチ！」

「わ、ずりい！俺も俺も！分詞教えて！」

「わかったわかった！ちよっと待ってるって…」

笑っているけど、どちらも勉強が得意ではないみたい。そういや私も今日の5限のリーディングの予習、まだ終わってなかったっけ。ジャージを畳んだあとでやりだしたのはいいけど、あまりに眠くなつて途中で寝たんだった…。

「秋津、私もリーディングの予習やるね！」

慌ててかばんからテキストとノートを引っ張り出す。席についてパッとノートをめくると、あちこちに不審な線がある。

げ…。

寝ぼけながらやってたからだ。

「うわっ、すごいノート！」

「あ、秋津っ！あー見ないで！」

とっさに隠したけど、時すでに遅し。

私のノートを覗きこんでいた秋津は、くすくす笑いながら「がんばれ」と言ってくれた。

「秋津早くー！」

「はいはい。じゃな、桐野」

「うん」

さてと、やるか。リーディングの先生、いきなり当てるから怖いんだよね。

シャーペンを持ち直した私は、

「桐野！」

という声に顔を上げた。

「リーディングの予習、あとで見せて？」

「え、やってないの？」

「実はね」

意外だ。成績優秀な秋津が予習を怠るなんて珍しい。ていうか、それで焦らずに友だちに勉強を教えに行ける余裕がうらやましい。

「だからちゃんと予習やっておいて」

「はあ？」

何だそれ！利用されてるじゃん私！

笑顔で去っていく秋津を一睨みしてテキストに向き合う。

わざと間違えようかな。

うーん。無理だ、それは無理。

絶対指摘されて終わる。

じゃあ、このままやらないでおく？

だめ、私の命に関わる。

だいたい、あの2人が来なければもっと話していられたのにな。

あ、でもそしたら予習忘れに気づかなかったかもしれないし、なんて微妙なボーダーライン。

……。

あ……れ……？

『話していられたのに』？

……。

私、もつと話したかった？

もしかして、秋津と話していたかったの？

えーっ！春花！春花に報告しなきゃ！

結局予習を投げ出して、私は春花のところに行った。

第8話（後書き）

いつもありがとうございます！

そろそろ動いてきました！

秋津は頭がいいです、うらやましい。

第9話

心臓がびっくりしてる。

そう、きつとびっくりしてるだけ。

これは恋じゃない、きつと。

恋じゃない、まだ！！

「ふうん、そんなことがね」

お昼休み、春花と私はお弁当を持って屋上に行った。今日は暖かいから外の方が気持ちいい。屋上は少し風が強いけど人が少なくて大きい声を出しても大丈夫なところがポイントだ。

「で、ナツはその2人が来なければ、もっと話していただけるって思っただね？」

春花の問いにこくりと頷く。

「つまりは、秋津ともっと話しかかったってことなのね？」

こくり。

「残念ながらナツ、それはまだ恋じゃないわ」

私は下げていた頭を急に上げて、本当！？と叫ぶ。それを見て春花はにっこりと笑った。

「そうよ。あんな2人を選ぶなんて！私とだけ話していればいいのに！って思うくらいにならないと」

「いや、ちよつとそこまではなれないかと…」
「そう思えるのが恋なのよ！」

今日の春花はなぜか話に力が入っている。ずっと話しているせいで、お弁当はまだ半分も減っていない。私が食べるぞ。

「春花、お弁当食べないの？」

「あ、ああ忘れてたわ。食べる」

揃つてもぐもぐと食べだし、屋上は暫しの沈黙に包まれた。春花はパンを、私はお弁当を無心に食べる。

暫くして、ごちそうさまと春花が声を上げた。は、早い！

「ふう、食べたわー。それにしても、意外。ナツは秋津か」

「秋津がどうかした？」

「ううん、なかなかいいチョイスだと思ってね。優良物件見つけたわねー」

「ぶ、物件って…」

だって、と春花は続ける。

「頭良し、顔良し、背良し。おまけに優しいと評判の秋津修よ？」

そうか。確かに秋津は女子からも男子からも人気が高いもんね。

今日クラスに来た男子のことを考えながら、卵焼きを口に放り込んだ。

それにしても今日もまた卵焼きがおいしい！

このなんとも言えない焼き加減が絶妙！！

「何ニヤニヤしてるの？そんなにおいしい？それ、確か冬くんが作

ってるんだっけ」

「そう！フユったらすごい料理上手で！」

フユは手先が器用だ。

もともと本を読むのが好きだったが、いつの間にか料理本にも手を出していたらしく、気づいたらいろいろな料理をマスターしていた。今では調子がよければ、早起きして家族みんなのお弁当を作ってくれる。

味ももちろんだけど、何より卵焼き1つでもちゃんと凝っているとこころが嬉しい！

今日は私の好きなカニカマが入っていて、ちょっとテンションが上がった。

「いいわねー！いただきっ！」

「あ、卵焼き！返して！」

お弁当を覗きこんでいた春花が、急に卵焼きを誘拐した。

そのまま彼はひょいっと春花の口の中に消える。

「あー……。たまごやき……」

「大丈夫、また作ってくれるわよ」

おいしいわね、と言いながら春花が私の肩を数回叩いた。落ち込ませた本人に慰められても嬉しくないんですけどっ！もういいよっ！春花はニヤツと笑って手を離れた。
絶対わざとだ！

「まあまあ。で、今日は何話してたの？」

「秋津と？えーと、ジャージとクッキーの話？」

「クッキー？」

「そう。お母さんが焼いた。春花もほしい？」
「頂戴」

仕方ないなあ。私な少しむすつとしたままお弁当を屋上コンクリートの上に置いた。

日差しがぼかぼかしているせいで、コンクリートも暖かい。

鞆の中をガサガサ探りオレンジの袋を引っ張り出すと、春花の方に「ハイ」と突き出した。

「ありがと！おいしそう！」
「でしょ！」

なんだか得意気になった。私が焼いたわけでもないけど、おいしそうと言われて嬉しい。

「お家でいただくね？おばさんによろしく伝えておいて」
「はい！そして、ごちそうさまっ」

卵焼き1つ取られたけど、おいしかった！
さすが我が弟、抜かりない！
そんなことを考えながら機嫌よくお箸をしまう。

「ところで、終わったの？」

春花が訊いてきた。
え、何の話？

「リーディングの予習」

リーディングの予習…。

あ…そういえば予習…あはは…。

「ごめん先に教室戻る！予習！！」

もうこれは泣くしかない。

だって半分までしかできてないよ！

マツハで片付けをして、階段を駆け降りる夏花の騒音を聞きながら、

「忙しいやつ」

残された春花は、クッキー袋を見てミルクティーを飲みながら、1人で笑った。

第9話（後書き）

ふう、ギリギリ投稿できました！

第10話

わいわいとクラス全体が騒がしい。
休み時間なんだから、当然かな？

私はジャージ姿のみんなを眺めて、ふうとため息をついた。

あれから1週間。

秋津に話しかけたいけど、勇気が出ない！

いや、やるうと思えばできるんだけど…正確には会話が続かない。
なんで!?

そうやっておろおろしているうちに、また火曜日になってしまっていた。

ちなみに先週は、結局リーディングの予習が間に合わなくて先生から怒られた。

秋津はというと、私と同じく予習を忘れてきたにも関わらず、当てられても涼しい顔で答えていた。

くそー、頭のいい人はこれだから!!

何度手を挙げて「秋津もやってません!」と言おうと思ったか!!

まあ、そこは我慢しましたよ、ええ。

今週はしっかりやってきたからね!

ちなみに今は体育の前、着替えが終わった休み時間。場所は天気雨が雨のため体育館。

今日は体育の先生が倒れた(!!)ので、自習になった。体育祭の準備での過労が原因らしい。

大丈夫かな…。

というわけで、ラッキーハッピー自習!と思ったのも束の間、なん

と男女混合ドッジボール大会をやることになった。
体育の先生が休みだと聞いた担任の森川先生が、

「たまにはドッジボールでもするのがいいんじゃない？私も昔はよくやったわ〜！ね？体育の時間なんだし、運動しましょ」

と、あまりにもノリノリで言うので断りきれず、やることになってしまったのだ。

森川先生恐るべし！たぶんこの学校で一番空気が読めない先生だと思っ。

あーあ、本当は春花と筆談しながら宿題でもやるはずだったのに…。

と言いつつ、いざ始まったら結構本気でやっている。

ルールは簡単。

クラスを4チームに分けたトーナメント制。

1試合15分で、終了の時点で内野に多く人が残っているチームの勝ちになる。

ああ、ドッジボールなんて久しぶりすぎる！

意外と楽しいかも！なんかこう、ガチでぶつかり合う感じがたまらない！！

「きゃあっ！当たるとこだった〜」

「もうー、男子もつと優しく投げて！」

「ナツこっちのチームにほしかつただけどー！！」

相手側のチームからヤジが飛ぶ。

そりゃ、男子が本気で投げたボールに当たったら痛いよね。でも、私はチームの女子をボールから守ってる訳じゃないんだよ？

ボールをキャッチしたいから前に行くの！
つまりは、たくさん投げたいわけ。

ちなみに一緒のチームの春花に「私の後ろに隠れていなよ」なんてセリフ吐いてないから！！

半ばあきれながらボールを投げようとした、まさにそのとき。

「ナツ危ない！！」

「ボール！当たる！」

鋭い声。

私は自分が持っていたボールを落として身を屈め、とっさに手で頭を覆った。

バシッ！！！！

痛ッ！！

……って声を出そうとした。出す準備をした。でも、おかしい。全然痛くない。

沈黙の中、ゆっくり体を上げる。

手を頭から外すと、知っている大きな背中。

これは秋津の背中だ。助けてくれたんだ……。

「い」

「い？」

「いつてえ！！誰だよこれ投げたの！？」

秋津がボールを放り投げて腕をさする。

そりゃ痛いよ、だってすごい音がした。

「あ、オレ投げました。滝本です！」

「お前か滝本！もうちよつと優しく投げろよな！俺でも痛いわ！」

「悪い悪い。いやー、桐野に当たらなくてよかったわ」

「そうだ桐野！けがは？」

秋津が振り返る。紫のダサダサジャージなのに、なんかかっこいい。

「けがは…ない…」

だって秋津が守ってくれたから。

隣のコートから駆けてきてくれたんでしょ？

だって、チーム違うもん。

「そ、つか…よかった…」

ねえ、そんな顔しないでよ…。

その笑顔、反則だよ…。

「な、桐野やつばどこか打った？」

「え？大丈夫だよ？」

「だって」

「な、何？」

「だって、お前泣いて…」

「え？」

慌てて手で頬を触る。

温かい何かがつつつと流れ落ちた。

「あ、涙…」

「なあ、大丈夫か？保健室行く？」

「大丈夫！その…痛いとかじゃなくて…なんかびっくりして！」

そっだよ、けがなんかしてない。

顔を上げると秋津の心配そうな顔が見える。

それが嬉しくて、また涙が出た。

ほらやっぱり。

もう…ダメだ。もう限界。

そうなんだ、私。

…好き。

私、秋津が好きです。

秋津のことが大好き。

今涙が出るくらい、秋津が好き。

実は分かってたよ。

たぶんこれは恋なんだってこと。

先週春花には違っつて言われたけど。そのときは違っつのかって思ったけど。

秋津と話したい。

もっともつと彼のことが知りたい、私のことも知ってほしい。

桐野じゃなくて名前と呼んでほしい。

それから、今みたいに私だけに笑いかけてほしい。

ねえ春花、これって恋だよね？

涙を拭う。

さっきから秋津が何度も「大丈夫か？」と訊いてくるから、いい加減泣き止まないよ。

それから、提案通り保健室に行こう。

冷やさないとまぶたが腫れちゃいそう。

待ってて秋津。

そのうち、捕まえに行っちゃおうから。

他の人に渡したくない。

ほんとは今だつて彼の側を離れて保健室に行きたくない。

でも、我慢。今日はまだ我慢。

ねえ秋津、と私は心の中で問いかける。

あなたのことが好きなの。

だからお願い。

もうちょっとだけ、保健室に行く前に笑顔を見ててもいい、かな？

第10話（後書き）

いつもありがとうございます！

ついにナツの心に進展です。
やっと自覚。

これからは…捕獲？？

閑話 春花の微笑み（前書き）

春花目線です！

閑話 春花の微笑み

私の名前は今川^{いまがわ}春花^{はるか}。

実は、彼氏がいます。

あ、違った。訂正。

彼氏のような女友達がいます。

ドアを開けてくれて、ゴミは捨ててくれるし、ピンチのときは助けに来てくれる。

まるで彼氏。

いや、えつと違うよ？

ナツにコクってくる女子とは違う。

「好き、付き合って！」「っていう感情じゃない。

でも、ナツはそこらへんの男子より乙女心をわかってくれるから。疲れたときは一緒に甘いもの食べに行けるし。

そんな私のここ最近の楽しみは、ナツを観察すること。

思っていることが顔と行動に出すぎて、見えて本当に飽きない！わかりやすい！

そんなナツに、好きな人ができたらしい。

これまたわかりやすすぎる。

話したくて、でも話せなくて。

「おはよう」「ひとつ言つにも緊張して、授業中は暇さえあれば彼を見つめてる。

もどかしくてたまらないけど、あえて口には出さない。前は協力す

るって言ったけど、今はする気もなかったり。
だって自力で捕獲しなきゃ！
そこまでの甘い道のりも恋なんだから！

ちなみに、相手の人は同じクラスの秋津。

もしも変なやつだったらナツのために一発殴ってやるうかと思ったけど、秋津なら…うーん、許してやるか。
背も高いし、頭もいいし、何よりナツと雰囲気合ってるから。
実はあいつナツのことからかって遊んでるから、そこだけ減点。
それは私の特権だったのに。

と…まあ、始めは面白がってるだけだったけど、今は親のような心で娘^{ナツ}の成長を楽しんでいる。

ああ、女子にコクられてばかりだったナツも、やっとここまで来たのね…。
笑みがこぼれそう。

だけど、ナツが秋津に取られるのも、ちょっと悲しい。お昼に一緒に弁当食べれなくなるかも。そう考えると、なんだか悔しくなつた。

ぐしゃぐしゃとメモを丸めて、授業中にうつらうつらし始めた秋津の頭に向けて投げた。

「あ た つ」

見事命中！

秋津はキョロキョロして回りを見渡す。
もちろん目なんか合わせてやらない。
彼は首をかしげてから前を向き直した。

これくらい、させなさいよ。
私のナツを取ったんだから。

私は微笑む。

確かに寂しいけど、ちょっと楽しいから。

閑話 春花の微笑み（後書き）

いつもありがとうございます。

前回の話で一区切りだったので、今日は閑話です

春花は敵に回すと怖そう…。

明日からはまたナツが頑張ります！

これから、毎日の更新に間に合わないことが増えるかもしれないのですが、よかったらまた覗いてください！

第11話

それは唐突だった。

「覚えてますか？この前お昼のときにおはしを拾ってもらった橋本雪枝です」

待つて待つて！この状況は、なに？

夕焼けが眩しい中、目の前にいる美少女。戸惑う私を気にせず雪枝はことを進める。

「あの、突然なんですけど」

嫌な予感。逃げ出したい、助けてほしい。でも放課後のうちの教室は誰も残っていないくて（誰もいない時間に呼び出されたから当然なんだけど）、どうしようもなかった。

「私、ずっと…」

もう何度も聞いたことがあるけど、言ったことのない言葉。そう言われるのは嬉しいけど、なぜ私なの？私はそれを望めない。

「好きです！」

出た、スキデス。

甘酸っぱくて優しくって勇気のコモった言葉。でも、今は恐怖の言葉にしか聞こえない。

もう嫌なの。その気持ちは私には重すぎる。

胃の辺りがきゅうつと痛くなった。
心臓の音がドクドクとこだまして、汗が出てくる。暑いはずなのに
体はすぐに冷えて。
でも、言わなきゃ。

「う、ごめんね…」

声を絞り出す。

あなたと同じ気持ちになることはできない。
お願いだから分かって！

あなたは女の子！
私も女子だからね！

そんな悲しそうな瞳をしないでほしい。
いや、させたのは私か…。でも、そうするしかないよね？今でも、
女の子に優しくしたり、世話を焼いたりすることがこんな形に繋が
るなんて不思議で仕方ない。
私よりもすてきな人なんて世の中にたくさんいるはずなのに！
例えば秋津とか。

そうか秋津。

ねえあなたならどうする？

逃げ出せない教室でどうすればいいのかな？

「桐野！帰るぞ」

あ、そっか、帰ればいいんだ。

つてできないでしょ！！

今置いて帰るとか、非道じゃない？

「…桐野?…きり…いや…ナツ!」
「え?」

秋津の音がする。本物?

後ろを見ると、本物の秋津が私を見下ろしている。少し苛立った顔だけど、それすらかっこいいと思えてしまっ私って馬鹿かな?

「帰るぞ」

「え、えっ?」

ちよ、ちよっと!

いつどうやって入ってきたの?

振り返ると秋津の体越しに空いた教室のドアが見えた。確かにここはうちのクラスだから、入ってきてもおかしくはない。でも、このタイミングって…!

「待って」

さっとは少し違う、低く怒ったような声が耳に入って、再び雪枝の方に体を向ける。

彼女はキッと秋津を一睨みして、

「桐野先輩、待ってください!誰ですかこの人…。もしかして…付き合っ」

とんでもないことを言い出した。

「え、この人は同じクラスの秋津で。あ!別にそういうんじゃない…」

冷や汗が流れる。

本人目の前で何を言うのかこの子は!?

いや実はそうなりたいたいなんて思ってた、なんて言えるわけがない!

「そつだよ」

慌てて言い訳をする私を制して、秋津はニヤリと笑った。意地悪な笑みを浮かべている。

「桐野、いやナツとは、そーゆー関係なわけ。邪魔しないでもらえ
る?俺ら今から一緒に帰るから。じゃ、行くぞ」

「ちよつと、ええ!?!」

こつちもこつちだ!!

涼しい顔ですごいこと言いやがって!
心臓爆発しちゃう…。

秋津はまだおろおろする私の手首を掴み、ついでとばかりに私の荷物を持ち上げた。

そのまま引きずるように入り口へ向かう。

「先輩!」

「橋本雪枝さん、ごごごめんね!ま、また今度会おうね!」

雪枝がうつすらと涙を浮かべて私を見た。

頬は林檎のように赤く染まっている。

そんな彼女を断ち切る様に、廊下に連れ出された私の目の前でドアがバタンと閉まった。

ああ、ひどい振り方をしてしまった。

申し訳ないな。

でも、連れ出してもらえてよかった。

本当に帰れないかと思ったよ…。

どうしてわかったんだろう？

今日はもう帰ったんじゃないの？

忘れ物取りにきた？

あいかわらず手首を掴んだまま、私の顔を見さえせず歩く秋津と歩きながら、私は1人考え込んだ。

その大きい背中に安心しながら。

第11話（後書き）

毎日ありがとうございます！

ナツがちょっと病んできました（汗）
大丈夫かなあ…。

明日はつづきからです

第12話

廊下に響く、2人分の足音。

手首を掴んでいたはずの秋津の右手が、いつの間にか私の左手を握っていて、焦った。

本当に一緒に帰る気なのかな？

秋津も高校の近くに住んでるから、確かに方向は同じだけど。

それとも、突然振り返って「なーんてな、冗談だよ」って笑うパターン？

放課後といっても、全く生徒がいない訳じゃない。むしろ、部活組はグラウンドや体育館で活動真つ最中だし、図書室だってまだ開いている。誰かに見られる可能性もあるのに。

秋津は何を考えているんだろう。

手を握られたままじゃ、階段も降りにくい。

そう、さっきだって。

どうしてあんなことをしたの？

「秋津」

私の声聞いて秋津が突然立ち止まる。

「わっ」

対応できずに私は彼の背中にぶつかった。

「うっ、うめん…！」

慌てて謝るけど、秋津は黙ったまま。
何か、怒ってる？

「あ…きつ？」

「ああ、もう嫌だ…」

「えっ？」

嫌？またなんか変なことしたかな？

いや、別にそんなにしょっちゅう怒らせたりしてないんだけど！

「なあ、ナツ」

名前を呼ばれる。

いつの間にか、桐野じゃなくなってる…。

ふいに心臓が跳ねた。顔がかあつと熱くなって、火照ってくる。

「いつも、あんなかんじなのか？」

「あんな、かんじって…？」

「さつき…コクられたんだろ？あの橋本雪枝ってやつに」

「な、何で橋本さんの名前知ってるの？」

秋津が前を向いたまま笑った。

ツッコむところはそこかよ、と咳く。

「橋本雪枝は中学の先輩の妹でさ、何度か見たことあったから。去年も文化祭くるって先輩から聞いてたし」

去年の文化祭。あの劇か…。

チクリと胸が痛くなる。

「いつも…いつもああやって女子からコクられてるの、か？」

秋津の言葉に私は頷いた。

「そう、かな。あ、場所はいつも教室とは限らないけどね」

明るく笑う。

そうでもしないと、なんだか泣いてしまいそう。

「嬉しい？そういうときって」

「うーん、確かに慕われてるってことはマイナスな感情じゃないから、嫌ではないよ。嫌ではないけど…他に、私以外に他にいっぱいいるのになあって思う」

「そっか」

そう言って、

「くくっ！」

秋津が笑い出した。

なんでなんで？

もう今日の秋津おかしいんですけど…！

でも、明らかに彼がまとう雰囲気さつきより優しくなって、安心した。

「そっだ、さつき俺忘れ物取りに来たんだ。結局、取らずに出てきちゃったけど」

「あ、やっぱり。…ごめん」

「取らずに、って言っただろ。取れなかった訳じゃないから」

…うん。こういうところまで、いちいち優しいんだよね、秋津って。

「忘れ物いいの？」

「まあ、筆記用具だから。家にもあるし」
「なるほど」

ふいに秋津が手を離れた。同時にそっと流れるような動作でこちらを向いて、私の前にしゃがむ。

え？しゃがむの？

いくら背の高い秋津でも、しゃがめば小さくなるに決まってる。私もしゃがんだ方がいいのかな。だってこれじゃ、必然的に私が秋津を見下ろす形になってる。

いやでも、うーん。2人そろって廊下の真ん中でしゃがんでおしゃべりって…。しかもここ1年の教室の前だし。

それに、秋津を見下ろす機会なんてそうそうないからなあ。あ、これってちよつとした優越感？

「今、何か失礼なこと考えてる気がするんですけど？」

「いいい、いや！考えてないっす！」

「ふうん？」

「ほ、本当だってば…」

「まあ信じてあげましょう」

しゃがんでたって、上から目線だし。

秋津も違和感を感じてからか立ち上がる。

あ、これこれ。こっちの方がしっくりくる。

「そっだ」

「ん？」

「ナツ、さつき連れ出してごめん」

「え？ええ、いいよそんなの！」

突然真面目なこと言うから、びっくりして声が裏返っちゃったじゃん！

いいのに、そんなこと。むしろ…

「連れ出してくれてありがとう。ちょっと困ってたから。誰もいなかったし、秋津が来てくれて助かりました」

ついでとばかりに頭を下げる。

だって、感謝したのは本当だから。

そのまま静止していると、いきなり秋津が私の頭を撫でた。2回くしゃくしゃと撫でて、すぐに手を引っ込める。

何これ…！？

しかも…くっ、今「もうちょっと」って言いそうになった…。やめる自分…！

「じゃあ、結果オーライってことで帰るか」

頭を上げる。

私の気持ちも知らないで、秋津は楽しそうに笑った。ドキドキすることばかりじゃがって！私はまださつきのことで訊きたいことがあるんですけど！

「ねえ、秋津。さつき橋本さんに言ったことって…」

「なあ、帰りに本屋寄ってかない？漫画の新作、今日発売日」

「え、もしかして『トウピース』？」
「そう」

フユに買ってきてって頼まれたやつだ！
忘れるところだった、危ない！

「寄るー！」

「はい、じゃあレッツゴー」

さっきの質問をまんまとはぐらかされたことに気づいたのは、家に帰ってフユに漫画を渡した後だった。

第12話（後書き）

いつもありがとうございます！
毎回字数がまちまちですみません…。

この焦れたいかんじはまだ続きます！
どうかもう少しお付き合いください。

しかし、『トウピース』って…。
もっと他の題名はなかったのか私…。

ま、まあ…近いうちに短編を載せるつもりなので、よければそちら
も覗いてください

第13話

午前8時、いつもの様に教室のドアを開けると、本を読んでいる春花と目が合った。

「おはよう、ナツ」

「おはよう!」

「今日早いね」

「うん、痛ッ!」

歩きながら挨拶をしてイスの背もたれに手をかけたとき、指先にチクリと痛みが走った。

なに…?これは画ビヨウ?

見ると、背もたれのちょうど真ん中にセロハンテープで画ビヨウが固定してある。

まるで怪我させるために貼ったみたい。

昨日まではなかったのに…。

「ナツ、どうしたの?」

「なんか、イスの背もたれのところ画ビヨウが貼ってあって」

座ったままこちらを見ていた春花が、慌てて立ち上がって駆け寄ってきた。

「大丈夫?」

人差し指の先で血がぷくりと膨れ上がった。

「大丈夫、これくらいなら針で指したのと変わらないから」

「絆創膏持つてくるから、トイレで洗ってきなよ」

「あ、ありがとう」

席に戻ってポーチを取り出す春花を横目で見てからトイレに行く。

蛇口を捻ると、冷たい水が指先で跳ねた。

冷えそう…。

血はすぐに流れたので、水を止める。

春花の絆創膏はオシャレな柄が多いから、ちよつと楽しみだなー！

「ナツ、はい絆創膏」

「ありがとう！」

今日は黄色にオレンジの花柄！かわいい！
裏をぺらりと剥がし、くるつと巻く。

よし、大した怪我にならなくてよかった。

「画ビヨウ危ないから取っておいたわ」

「ありがとう！さすが！」

「それにしても誰があんなことを。昨日まで何もなかったんでしょ？」

「うん」

「完全に誰かの仕業よね…。ねえ、誰か心当たりあったりする？ナツのこと悪く思ってそうな人」

…すごく思い当たるのは気のせいかな。

昨日の今日だし、あの別れ方だし。

「は、橋本雪枝…さん」

「橋本？誰？」

「前、おはし拾ってあげた1年生……」

「あ、劇のフアンのあの子か！」

春花はぽんつと手を打って頷いた。

それから私の机に堂々と座る。

「で、その子と何かあったの？」

「えーと、まあいつものごとく」

笑ってみせると春花は呆れたようにため息をついて、そのきれいな指で私のおでこをピンと弾いた。

「あたっ！」

「まったくナツは何度も……。で、今回は何が原因でここまでなっちゃったの？振ったから？それとも、振り方が悪かったとか？」

「ど、どっちも？」

「はあ？」

春花が怪訝な顔をして私の顔を覗き込んだ。

仕方ない……昨日のこと言うか。

私は、教室に呼び出されたところから秋津と逃亡したところまで春花に話した。

秋津が連れ出すときに言った爆弾発言はさすがに伏せたけど……。あのことはまたちゃんと訊かなきゃ。昨日は結局はぐらかされたしね！

「なるほど。それは怒るわね……。あの子すごくナツのこと好きで追いかけてたし、もしかさかたらこれからも何かあるかもしれないわね。注意しなよ？」

これからも、か。

「謝りに行った方がいい？」

「付き合う気があるならね」

私の机から腰を上げながら春花は言った。

「そうでないなら、逆効果よ。やめた方がいいわ」

「うー。もう勘弁して…」

女の子って、かわいいけど怖い。

どこまでも追ってくるあの執着力とか、観察力とか、プロの探偵に向いていると思う。

頭を抱え込む私を見て春花が笑った気配がした。続けて頭を撫でられる。

いつも毒舌を吐いて厳しい春花だけど、私が弱つてるときはちゃんと支えてくれる。

「大丈夫よ。今までも乗り越えて来たじゃない。堂々としていなさい。それに、今回は秋津もいるし」

パツと顔を上げて春花を見上げる。

私と目が合って笑うと、彼女のきちんと手入れされた髪がさらりと一房流れた。

「なんで秋津？って顔してるわね。だって、こつやって嫌がらせ受けたのは、連れ出したアイツにも責任があると思わない？」

お、思わない！ちょっと春花！

あのときは本当に困ってて、責任っていつかむしる感謝するくらいだし！

「いいのよ、その方が秋津も楽よ。私がナツに何も言わず1人で悩んでるの、嫌でしょ？しかもナツにも関係のある話で」

「嫌！！」

でしょ？と言って、春花は軽く首を傾げた。

「でも、とりあえず今は言わないでおくわ。今日みたいなことが続くとも限らないしね」

「うん」

これっきりであってほしいけど、きっとそんなことはないと思う。それは春花も私の話から気づいたはず。でも、なるべく秋津を巻き込みたくない。

もう、どうしてここの問題はかり起こるんだろう。

第13話（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます！！

な、なんと…気弱そうな橋本さんが大暴走し始めてます！

「橋本より秋津出せよ！」という方、次はちゃんと出す予定です…。

よかったですらまた明日も覗いてください！

第14話

風邪を引いた。：また。

鼻声で学校に電話すると、受話器の向こうで先生も苦笑していたけど、一応「ゆつくり休んでね」とは言ってくれた。

体が熱いし、ううっ、頭も痛い。

私は電話を枕元に置いて、もう一度布団を掛け直した。同じく枕元にあるスポーツドリンクを一口飲む。

原因は昨日の事件に違いないと思う。

改めて、女子って、いや橋本さんってすごいなあ…。あんなにかわいい子が、と思うと怖いを通り越してすごいと感じてしまう。

昨日の事件の始まりは放課後。

私は春花と校舎横の花壇にいた。この花壇は体育の備品が置いてある体育倉庫と校舎の間であって、普段はあまり目立たない。

そのせいか、花壇といっても雑草生え放題、荒れ放題で、夏は蚊の巣窟になるから誰も近づかなくなった。ちなみに私も嫌！！だってあそこ、夏が終わった今でも蚊が生きてるんだよ！？

ちなみに言い訳をすると、私たちは好きで行った訳じゃありません！美化委員の仕事で仕方なく片付けしたんですから。

私と春花は学校の美化委員に所属している。

その名の通り校内の美化に努めているので、こうやってたまに放課後に残って掃除をする羽目になる。たまにだからいいんだけどね。

で、今回は荒れ放題の花壇に目がつけられたということで、私たち

美化委員はジャージと軍手着用の下、花壇に繰り出した。

私はいいけど、見目麗しい春花がダサいジャージを着て、土をガツガツと掘り、根から雑草たちを引っこ抜く姿はなんともいえない…。他の委員（主に男子）もチラチラと春花を見ては、陰でため息をついている。

もちろん私も負けずと雑草と格闘した。軌道に乗り始めると単純作業も楽しい。そのとき。

バシャン！！

その場が一瞬で固まった。

誰も何も言わないのに、全員の視線だけが私の方に集まる。

今度は水。

朝は画ビヨウで、夕方は水…。

上を見ると、ちょうど真上の3階の窓が開いている。

「ナツ！大丈夫！？」

「う、うん…へ、へっくしゅ！」

桐野！と大きな声がして、美化委員の木下先生がこちらに走ってきた。

木下先生は理科の先生で、いつでも白衣を来ているのが特徴だ。しかも、美化委員の活動中でも脱いだことがない。

「桐野、どうした？」

「あ、水が落ちてきて…」

「水が勝手に落ちるわけないだろう、誰かの仕業じゃないか？」

「あ、そうだと思います…」

「かといって探すわけにはいかないだろう。…今日は帰りなさい。その格好では風邪を引いてしまうだろう」

11月に水を被ると、さすがに寒い。

私は一度だけ頷いて立ち上がった。

ありがたく帰らせてもらおうかな？

春花が目だけで「気を付けて」と伝えてきた。橋本さんのことかな。まさか水を被せてくるなんて…寒っ！

…そして現在に戻る。

結局風邪を引いて寝込んだ。

ちなみに寒いので制服に着替えて帰って、ジャージはすぐに洗濯機に放り込んだ。たぶんお母さんは気づいてない、はず。

「ねえちゃん！ただいま！」

ベッドでうとうとしていると、ドアが細く開いた。弟のフユだ。あれ？フユ今日学校だよな？

「フユ、学校は？」

「何言ってるの、もう終わったよ」

「え、今何時？」

「5時」

いつの間にか寝てたみたい。そういえば、ちょっとスッキリした気がするかも。

「ねえちゃん」

「何？」

「お客さん」

「へ？」

お客さん？春花かな？

も、もしかして橋本さんじゃないよね…？

「ナツ？」

違う、春花じゃないこの声。

まさか、でもなんで家に？

入るぞ、と声がしてフユが体を退けた。

よく知ってる人。私の大切な人。

「大丈夫か？風邪引いたって聞いたけど」

秋津…。

秋津が家にいる…。

思ったより元気そうでよかった、なんて言っただけで笑ってくれた…。

ど、どうして？

第14話（後書き）

いつもありがとうございます！

いつも0時更新なのですが、ちょっとオーバーしてしまいました…。

秋津出すと言ったのに、結局最後にちらりだけですみません…！！

明日ガッツリ出ます…！！

むしろ秋津しか出ないですよー！

第15話

どうなってるの？

熱を出して寝込んでいたら秋津が家に来た。

「その人、ねえちゃんと同じクラスの人？」

「そ、そうだよ。秋津：くんていうの」

「ふうん。家の前でうるうるしててさ、ねえちゃんと同じクラスの人だって言うから、一応上げたんだ」

フユがちよつと疑わしげな目で秋津を見た。

その様子がごはんの品定めをしている猫にそっくりかも。そんなフユの隣で、秋津はクスクス笑っている。どうもさつき私が「くん」付けで自分呼んだことがツボに入ったみたい。

失礼な！自分でも違和感を感じたけど！

じろじろと秋津を見てから、フユはねえちゃんがそついうなら、と言い残して部屋から出ていった。扉がぱたんと閉まって、なんともいえない沈黙が流れる。

「あ、座って！どこでも！そうだなんかお茶とか」

「いや、お構いなく。てか病人にさせられないから！寝てて」

立ち上がる私を制して、秋津はベッドの側に座った。ついでとばかりに、私の布団を掛け直してくれる。

「ありがとう」

「ん」

妙に恥ずかしくて、布団を口元まで引つ張りあげた。パジャマだし、髪もボサボサだし。

「あ、そうだこれ」

「何これ？」

「進路調査の紙」

「…」

「提出は金曜日」

「…」

「返事は？」

「…ハイ」

「あと、こっちは今川から」

「あ、ノート!!」

私は思わず笑顔になった。

さすが春花！大好き！授業のノートを取っておいてくれたんだ!!

「さっきと大違いの喜びよう」

「だって…」

「まあ、授業用ノートが全部ロッカーの中にあるっていうのは、あまりよろしくないと思うけど？」

うっ…。鋭い指摘に苦い顔になる。

秋津は意地悪い笑みを浮かべて私を見た。

「ぜ、全部ではない！古典と英語と数学と地学と現国くらいだから」

「ほぼ全部じゃん！」

「世界史は持って帰ってる！」

まあ、世界史は毎回プリントだから、ノートは宿題にしか使わないし。正確には家に置きっぱなしというか、たまにしか持っていていかないというか…。

「あーわかったわかった」

「…絶対そう思っていないでしょ」

「まーね」

と軽く流すと、秋津は頭だけ動かして部屋をぐるりと見回した。

「汚いって言わないでよ」

自覚してますから。

「いや、思ったよりきれいかも？」

「それも失礼！」

でも確かに、昨日はすぐ寝たから片付けてないし、もういいやと思つて教科書出しっぱなしだからなあ。

「ナツ？」

「あ、うん。ごめん、何？」

「今日風邪引いた原因つて、もしかして…」

コンコンコン

「ハイハイ！失礼します！！お茶お待ちどうさま！このテーブルに置くね？あ、ねえちゃん猫舌だから赤いカップの方で」

ノックからドアが開くまでおよそ1秒。

フユが唐突にドアを開けた。

開けるの早っ！しかも、秋津が何か言いかけたところだったのに！なんてタイミンクの悪い…。

フユはお盆をベッド横のミニテーブルに置いて、再び体を起こした私にカップを手渡してくれる。

「はい、秋津さんも」

「ありがとう」

き、気のせいかな…。
今バチって何か散ったけど…。

秋津にお茶を渡してから、体を反転させると、フユはベッド脇で仁王立ちをした。

「ねえちゃん熱は？」

「えーと、ない？」

「ちゃんと測りなさい」

「う…」

しばらくならみ合ったけど、これは誤魔化せないかも。私は体温計を取り出した。

もう、こついつときはどっちが年上かわからなくなる。

体温計を挟んで少しすると、明るい電子音がピピッと音を立てた。

「どじっ？」

「えっと、38.6」

「寝てる」

2人同時に声が上がリ、続けて秋津が立ち上がった。フユも私からカップを取り上げて片付けをする。呆気にとられている間に、秋津が帰る準備万端で私を見下ろしてにこつと笑った。

「じゃ、またな」

え、何なのこの展開…？

さっきまで和やかに（？）話してたのに！

「じゃ、ねえちゃん、またね」

秋津が部屋からでるとフユがばいばいと手を振り、扉をそつと閉めた。

第15話（後書き）

毎日ありがとうございます

思ったよりフユがいっぱい出てきました（笑）
秋津は次の話も出す予定です！

では、また明日、よかったら覗いてください！

第16話

正直あまりまだ学校に行きたくなかった。昨日の今日で見事に熱は下がったし、体はすごく元気なんだけど学校に行くぞ！っていうテンションにはならない。

橋本さんから何かされるかもしれないと思うと怖いっていうのもあるし。

うーん、でも春花にノートお礼言わなきゃいけないし。秋津にもプリント持ってきてくれたお礼しなきゃ。

大丈夫、こんなことでへこたれる私じゃない！！

「ねえちゃん学校遅れるよ？」

「あ、うん」

リビングを行ったり来たりしている私を目の端に捉えてフユが忠告した。

フユの通う中学校は家から10分なので、朝はのんびりごはんを食べて、テレビで芸能ニュースを見てから行っても十分間に合う。今日もまだイスに座ってトーストをかじっている最中だ。

ちなみに我が家は共働きなので、朝は各自で取ることが多い。今日も両親は出勤済み、フユが作ってくれた朝ごはんを食べた。

テレビのリモコンを操作していたフユが、いきなり「あっ！」と言っ
って私を見上げた。

「そつだ。秋津さんが7時30分に迎えに来るって言ってた」

は、はあああ!?

なんで迎えに来るの?

もしかして、(たぶん)橋本さんによる嫌がらせのこと知ってる?

「すっかり伝言忘れてた!なんか心配だからとか、今川に頼まれてるからとか言ってたけど。ねえ、今すっごいマヌケな顔してるよ!」

春花に頼まれた?

春花が秋津に言っただってことかな。

確かに昨日のノートだって、春花が持って来てくれてもおかしくなかったのに。

「ねえちゃんにもついにモテ期が来たのかなあ。弟としては複雑だけど。あ、そういや今川って春花ちゃんのことだよな?僕、久しぶりに会いたいなー。また今度連れてきてよ!」

「う、うん!」

トーストを食べ終えて、フユが牛乳を一気に飲んだ。ゴクゴクと喉の鳴る音が聞こえる。それと重なってピンポンとチャイムの音がした。

「ほら来た。荷物は?」

「じ、準備してる!」

「はい、いってらっしゃい!」

いってきますと言うまでもなく、外に出されてドアが閉まる。

フユ:姉に対してなんだか冷たくないかい?

「おはよう!」

恐る恐る振り返る。
やっぱり秋津がいる！

「お、おはよう」

ややぎこちない挨拶を交わすと、秋津は先に歩き始めた。さすが長身、一歩が大きいな！速っ！
置いていかれないように駆け出す。

朝からこの状態って、心臓に悪い。
だって、私は秋津が好きなんだよ？
でも告白はしてないし、彼女でもなんでもない。たぶん秋津も私の気持ちを知らない。
なのに、家まで迎えに来てくれて一緒に学校に向かっている。

絶対春花の策略だ。

「ナツが危ないのよ」とか言ったに違いない！下手すれば「秋津にも責任があるんだから」とか言っちゃってるかも…。あり得る…。

前を歩く秋津の背中を盗み見る。
学ランに包まれた背筋はスツと伸びていて、かっこいい。

ふいに笑いが込み上げた。

秋津は今私がこんなこと考えてるなんて知らないんだよね。

「何？何かあった？」

「うっん、別に」

秋津が歩くのを止めて振り返る。
それから笑っている私を見て、顔をしかめた。

「変なやつ。ま、熱が引いたみたいでよかったけど」

それだけ早口で言うと、彼はまた前を向いて歩を進め始めた。まだちよつと笑いながら、私も遅れじと着いていく。

そっか。

今、秋津を独り占めにしてるんだ。
ふとそう思った。

秋津が後ろを気にするのは私だけのためで、早足だったのを遅くしてくれたのも私のためで、振り返るときは私だけを見ている。独り占めって、いいかも。

朝の憂鬱さを吹き飛ばすくらい、私は幸せな気持ちになった。

…そのときはまだ、学校で彼女と対峙することになるなんて考えてもなかったから。

第16話（後書き）

今日もありがとうございます！

お気づきかと思いますが、ナツはものすごく流されやすい子です
笑)

でも、芯のある人にしたいと思ってます。
そして次話はそれが垣間見えるはず？

第17話

桐野先輩おはようございます、と甘ったるい声で後ろから挨拶されて、思わず背筋にゾツとしたものが走った。

ロッカールームの前の廊下は私たち以外誰もいない。

声の主はわかってる。

…けど、後ろを向いたままで「橋本さん？」と尋ねた。

「もちろんそうです。そっちに私はいませんよ？ちゃんと私の方に向いてください」

笑いを含んだ言葉。

言われなくても向くから！

そう言おうと思った衝動をぐっとこらえて振り向く。

隣で秋津が唾を飲む音が聞こえた。

「おはようございます。お久しぶりですね」

柔らかに微笑んだ彼女は何か違う。

うまく言えないけど、今日の橋本さんは私が今まで見てきたあの子じゃない…。

どうしてだろう？化粧が濃いから？スカートが短いから？それとも私を見据える目が鋭いせい？

しばらく見つめ合ってから、つやつやのグロスが塗られた唇を開いて、彼女は悲しそうな声を出す。

「そういえば、覚えてますか、あの日のこと。あの放課後のことです。私、あの後すごく寂しかったんです。ひとりぼっちで教室に残されて、何もできなかったから」

「それについては謝る。ごめんなさい！」

「別に謝ってほしかった訳じゃないんです」

そう言いながら潤んだ瞳に映る悪意が怖い。

今の橋本さんの目はギラギラしてるようなかんじ。獲物を見つけた肉食獣のような瞳に見つめられて、思わずたじろいだ。

「大丈夫か？」

その様子を見ていた秋津が小声で尋ねてくれた。

声は出さずに頷く。まだ大丈夫。

「ねえ先輩。その人は何なの？桐野先輩の何なんですか？朝から一緒に来るなんて…許せない…」

秋津が私に話しかけるのを見て、橋本さんが怪訝な顔をした。

どうやら秋津が気に入らないみたい。でも、何なのって別にあなたに関係ないじゃん。

私にとって秋津は大切な人だけ。

「私だって、あなたが…好きだったから…。あなたのためを想って…。でも、先輩は私の気持ちを受け取ってはくれない。だから、この想いを分かってもらうために…いろいろしてたんですよ？」

知ってた？と訊くように、目の前の少女が両手を広げて微笑む。普段はかわいらしく見える仕草に、今は無性に腹が立ってきた。

どうしてそんな目をするの？

あなたにとつて私はどんな存在なの？

憧れと恋は違う。

憧れてもらえるのは嬉しい。

百歩譲つて恋になつたとしても、でも…それは相手を思いやる気持ちが必要じゃあきつと意味がない。

「好きだから、あなたを想つて」なんてその人が作つた理由でしょ？大切な人を理由にするなんて、私は許せない。

いっそ、言つてしまおうかな。

「ナツ、言うな」

その言葉にハツとして秋津を見上げた。もしかして考えてることだだもれだった？

「ナツはそれを言うな。きつと今ナツが考えてる正論はあいつを傷付ける。そうすれば、またこの前みたいなのが続きかもしれない」

秋津の真剣な声は私を冷静にする。

私はこくりと頷いた。

やっぱり知つてたんだね、画ビヨウと水の事件のこと。

秋津の言う通りだ。そう、きつと彼女は混乱してる。

憧れてた人とやっと話せた。なのに、いきなり現れた知らないやつと一緒に帰つていったなんて。もし自分と秋津のことだと思つと胸が張り裂けそうになる。

でも…でも、やっぱり理解できないよ。

私は秋津が好きだけど、傷つきたいわけじゃない。

私のことを見てほしいけど、そのために怪我をさせたり、風邪を引かせたくはない。それをすれば確かに意識は私に向くけど…でも、違うよ。

私はただ秋津に傍にいてほしいの。
支配じゃなくて、心が望むままで。

第17話（後書き）

1日あけての更新です。

再び読んでくださった方、ありがとうございます…！

橋本さんの愛が歪んできます…。

もう私でも止められないです。

という事で、もう少しお付き合いください！

第18話

目を合わせていられなくて、私は下を向いた。再び顔を上げると、前に立っている女の子が意地悪い笑みを浮かべる。でも彼女顔に似合わず真剣な声を出した。

「いいですか桐野先輩、私もう一度言います。あなたが好きなんです。私と付き合ってください」

がらんとした廊下に響く声。

いつもは混雑するはずのロッカールームなのに、今日に限って見計らったように誰も来ない。

いいですか、ってまるで小さい子に確認するみたい。それって『付き合わないこれからどうなるかわからないよ』ってことなの？

私は顔を曇らせた。

こんな展開は初めてかも。

画ビヨウなら今までもあった。水はさすがになかったけど、飲み物をこぼされたことはあるし、それくらいなら耐えられなくはない。いつも春花の助けもあって、ある程度我慢していれば諦めてくれた。

そう、そんなくらいじゃ屈しないけど。

今気になってるのは秋津のこと。

このままだと、きっと秋津はこの先も世話を焼いてくれる。そうすれば、橋本さんは彼のことを邪魔だと思い始めるかもしれない。

矛先が私ならいいけど、もし秋津に移動してしまっただら……。申し訳ない。そんなことは絶対させられない！

「先輩、決められないの？」
「…っ！」

冷やかな目で見つめる橋本雪枝。

彼女はイライラしたように右手の親指の爪を噛んだ。

「どうして？何が気になるの？その男？」

「ち、違う！秋津は何も関係ないから」

「関係ないなら、どうして邪魔するの？放課後のときも、今だって一緒に学校に来てる。私に見せつきたいわけ？」

「だから、違うってば！落ち着きなよ！」

やばい。

どンドン悪い方向に行ってる。

このままじゃ今日のうちに秋津が標的になってしまいそう。

「落ち着けるわけない！ハッキリして！」

「だから…」

「俺のこと、そんなに気になるのか？」

私の言葉を制して秋津が口を開いた。やめて、と言おうとした私を手で制して、彼は一步前が出る。

「確かにさっきのナツの発言は間違ってるかもな。俺は関係ないわけじゃない。あのとき教室から連れ出したことがきっかけてナツは嫌がらせを受け始めたわけだし」

「嫌がらせ！？違う！」

ああ、お願いだからやめて…。

嫌がらせと言われた橋本雪枝が頬を赤くして抗議する。しきりに「先輩のため」「私だけを見てほしいくて」と呟いて、さらに爪を噛んだ。

「じゃ、何なんだ？好きな人傷つけて楽しいか？そんなことをして自分だけを見てもらえたとしても、俺だったら何も嬉しくないな」

「なっ…！」

ちよっと！

さっき私に言うなって言ったくせに同じ様なこと言ってるし…！

「ナツはお前のものにはならねえよ」

「ひ、ひどい…」

「ひどいのはお前だ」

もしかして、秋津…怒ってる？

どうして、私のために怒ってくれてるの？

橋本雪枝はさっきまでとは違い、青い顔をして秋津を見上げていた。その瞳にうつすらと涙が浮かぶ。続けて私を見て、再び口を出した。

「もういい。桐野先輩の気持ちはわかりました。隣のあなたの気持ちも。でも、私は変わらないから」

覚悟してと言わんばかりの口調で言い放つと、橋本さんは踵を返して歩いていく。

「ま、待って！」

私の声を無視して、彼女は階段を駆け降りて行った。残されたのは

私と秋津の2人だけ。

これは、春花を交えて会議が必要かも。

第18話（後書き）

ちょっと更新が遅れつつあるので、がんばります…!!

橋本さんの今後はどうなるのでしょうか…。

そしてナツと秋津の関係がいまいち進展しなくてすみません!!

進展させる気はバリバリあります!

書く気は満々なので、もう少しお付き合いいただけると嬉しいです。

第19話

「で、逆上させて終わったと？」

まだ苦い思い出が残る放課後の教室、秋津と私に春花を加えて会議…というか説教を受けていた。

ほんと容赦ない…。

ちなみに、今日は春花も予備校がないみたい。

3人とも帰宅部だから助かった。

「悪い、俺つい感情的に…」

いつも明るい秋津が珍しくうなだれていた。

朝の発言、結構気にしてるらしい。

確かにあんな風に怒る(？)秋津は初めて見た。

あんな状況なのに、低い声もいいなあなんて考えてたなんて言えない。

「まあ、仕方ないわよ、私だったらもつとキレてたかも。もう勘弁してほしいわね…。今日で完全に秋津も標的になったわよ？迎えに行かせたの、間違いだっただかなあ」

「そ、そうだ春花！なんでそのう…いきなりお迎えとか？」

「だって心配だったから。風邪引いてたし、その状況であの子に何かされたらダウンしちゃうと思って。あ、そういえば風邪は大丈夫？」

「遅っ！」

つつこんだ私をかるく流して、春花はとにかく、と続けた。

「朝のゴタゴタに私を呼ばなかったことは大きなミスね。でも、今更言っても過ぎたことだし、お説教はこれくらいでやめておくわ。彼女は簡単には諦めてくれなさそうだから、2人とも警戒しててね」
「はい」「ああ」

同時に返事をした私たちを見て満足げに頷いた春花は、ふいに私の頭をポンと叩いた。

「ナツ、落ち込まない。秋津はナツのせいで巻き込まれたとか思っ
てないはずよ、ねえ？」

いきなり話を振られて目を丸くした秋津は、一瞬の間のこと大きく首を縦に振った。

「うん、ありがとう…」

やっぱりこういうときの春花は優しい。

ちゃんと説教してくれる友だちは春花くらい。

「しょうがないなあ、今日は春花先生がいちごオレをおごってあげ
ましょう」

「え、ほんと!？」

「ほんと」

春花は左手で髪をすくと、机の横に掛けていたトートバッグから財布を取り出した。

クリーム色のレースが付いたピンクの二つ折り財布。その中から200円を出すと、私に「ハイ」と渡した。

春花：なんて優しい！

いちごオレをおごつてくれるなんて！

いちごオレは80円。

手が届かないわけじゃないし、むしろお手頃な値段なんだけど、私と春花の間ではいちごオレは特別なときに飲むものになっている。特別だと落ち込んだときに明るくなれるから、ということとで1年のときに2人で決めた。ちなみにいちごオレにしたのは、2人ともそれが好きだからってという理由。

「私の分もお願いね。あと、おつりはちゃんと返すこと」

「了解です！」

うって変わって笑顔になった私。

春花はにっこり微笑んで頬杖を付くと、秋津の方に顔を向けた。

「大変申し訳ないけど、秋津の分までおごる余裕はないの」

「や、別にいいよ。自分で買うし。俺、抹茶オレの方が好きだから」

秋津はそう言って笑うと財布を取り出した。

黒い財布。使い込まれた二つ折り。

「あ、私買ってくるよ。抹茶オレだよね」

お小遣いをねだるみたいに右手を差し出すと、秋津は笑いながら自分の左手を私の手の上に載せた。もちろんその手の中にお金はなくて。

あれ？と首を傾げると、そのまま手を握ってぐいっと引つ張られた。

え、ちょっと！

なんで引つ張る！

お金を渡してって意味なんだけど！

「一緒に行く」

えっ！？

思わず助けを求めるように春花を見ると、あいかわらず頼杖を付いたまま手をヒラヒラと振った。

声を出さずに口パクで「いってらっしゃい」と伝える。

そのまま半分引きずられながら、私と秋津は自販機に向かった。

第19話（後書き）

こんばんは！いつもありがとうございます！

こちらへんで宣言しておきます。

秋津は『肉食系男子』です！！

そろそろ顔を出す頃かな？

第20話

ど、どきどきする…。

秋津は私の手を握ったまま鼻歌なんか歌いながら歩いていくけど、私はどうしていいか分からない。空いている方の手にある春花にもらった200円が、妙に冷たく感じた。

廊下に誰もいなくてよかった…。

今日は廊下運はついてるかも。

いや、そんなこと考えてる場合じゃなくて！

この状況おかしい！飲み物買いに行くのに手繋いでるとか、付き合いたてのカップルでもやるかどうかの行為じゃないですか？

「秋津？」

「…」

あ、今無視しましたよ。

「秋津！」

「…何？」

「手」

「え？」

「手を、はなして」

子どもに言うみたいにくっくり話すと、彼は立ち止まり、私の目を見て少し考えてからゆっくりと手をほどいた。

ああヒヤヒヤした！もし誰かに見られたらと思うと…。

手をはなすついでに、秋津はふうと息を吐いた私の顔を覗き込んだ。

「な、何？何かついでる？」

「いや？顔、赤いから」

「え！？」

「なんてな？」

いつもみたいに明るく笑うと、秋津はくるりと背を向けて彼は歩き出した。

顔、赤いのかなあ？

頬に手を当ててみるけど、あまりわからない。

もう、なんなの！

私の前を歩く秋津が、軽快に階段を降りる。

オレがある自販機は1階。

階段を降りてすぐの場所にあつて、食堂からも近い。ちなみにオレは我が校で一番人気だから、人がいっぱい来る文化祭や夏の暑い日には、お昼休みに売り切れになることもある。

そろそろ冬になるこの季節は大丈夫かな？

どちらかというと冷たいオレより温かいココアが売れるようになるみたいだし。

先に自販機に到着した秋津が100円玉を入れてボタンを押す。

機械がウィーンと動く音がすると、続いて30秒お待ちくださいの表示が出て、ランプが点灯した。

「なあ、ナツ」

取り出し口付近にしゃがんだ格好のまま、秋津は顔だけをこちらに向けた。

「本当に…その、悪かった。あのとき…放課後の教室で連れ出して今になってややこしいことになった」

…きた。

秋津なら絶対謝罪すると思ってたよ。

連れ出してもらえて嬉しかったんだって。

本当に困ってたし、来てくれたのが秋津でよかったって思ってる。あれから何度も言ったのに。

何も言わない私を一瞬だけ見て、彼はでも、と言葉を続けた。

「なんでかな、あの教室からナツを出さなきゃいけない気がして…。だから、後悔はしてないから。こんなことになって俺に責任ないって言ったら嘘だけど、後悔はしてない」

自販機がびーとマヌケな音を立てた。

秋津は立ち上がり、取り出しから抹茶オレを手取る。それから2歩つしるに下がり、「お先」と小さく呟いた。

私は慌てて自販機に駆け寄り、どこかぎこちなく1000円を投入する。『いちごオレ』と書かれたボタンを押して一息ついた。今度は20秒お待ちくださいの字が浮かび上がる。

「笑つよな、相手は女なのに嫉妬するなんて」

「え？」

今、なんと？

「いや、何でもないよ。とりあえず、橋本からまた何かやられたら

すぐ言えよ?」

「う、うん……」

「じゃないと今川に怒られる……」

「あ、だね……」

どうやら秋津も春花の怖さに気づいたみたい。

2人して納得し合っていると、ガラガラとカップに氷が入る音がして、再び自販機が音を立てた。

取りに行こうとしたまさにそのとき「ナツ」と声がかかった。首を傾げて秋津を見ると、ふいに大きな手が降りてきて一番だけ頭を撫でられる。

意味が分からずにさらに首を傾げると、秋津は少し笑いながら「取っておいで」と言った。

第20話（後書き）

いつもありがとうございます！
毎度ながら乱文すみません…。

もうちょっとだけ、2人きりのお話が続きます

閑話 水族館（前書き）

少しだけ修正しました。
なので、少しだけ長くなりました。

閑話 水族館

突然ですが、私は今水族館にいます。

… 1人じゃないよ！

「待った？悪いな」

「あ、全然…」

チケット売り場から駆け足で駆け寄ってきたのは秋津修。私のクラスメイトで、私の好きな人。

今日の秋津はブルーのストライプシャツの上にグレーの薄手セーターを着ている。下はカーキのパンツを履いて、仕上げに紺のダブルコート。

シャツの襟だけが白になってるのが、なんだかお洒落！

対する私は紺のニットセーターにショートパンツ、タイツにムートンブーツという動きやすさ重視の格好をしていた。だってスカート寒いじゃん？

ちゃんと上からモッズコートを着ているから、防寒もばっちり。

そう。

今日はうっかり秋津と水族館デートをすることになってしまった。

もともと水族館は春花が行きたがった場所で、それを知った秋津が誘ってくれたのだ。まあ、秋津のお父さんに頼めば、チケットが少し安く手に入るからっていうのもあるけど。

秋津パパありがとう！

というわけで、カップルが大勢いる中3人で水族館に行くはず…だったんだけど。

朝早くに風邪を引いて行けなくなったから2人で行ってきて、って
いう連絡が春花から来て…そして今この状況。

2人で入り口に並んで、2人で館内地図を見て、2人で回る順番を
決めたりして。

…デートか！

こ、これって初デートに入るのかな？っていうかそもそもこれはデ
ートなの？遊び？

いやでも少なくとも私は秋津が好きなので、となると私にとって
はデートってことになるよね。

今も館内地図とにらめっこしている秋津を見つめる。私服こんなか
んじなんだ。もっとチャライかんじかと思ってたけど、意外。

あーこれならもうちょっとかわいい格好してくればよかったかなあ？

ブブとポケットが震えて、メール受信を伝えた。

差出人は春花。写メ付き？

『件名：でーと！』

本文：やつほー！楽しんでる？もうすぐ開館かな？今日は2人で楽
しんできてね 私は今、ナツの家にお邪魔してるよ！久しぶりに冬
くんに会ったら、大きくなっててびっくりした！すっかりイケメン
になったねー。狙おうかしら（笑）じゃあ、しっかりね！

追伸、風邪引いてません。』

もう…言葉が出ないよ。

春花…わざとなの？

いや、絶対わざとに決まってる！じゃなきゃフユと撮った写真を添付してこない！

なんて友人…。

でも、ちょっとだけ嬉しいけど…。

—————

水族館内を見て、ショーを楽しんだあと、私たちはハンバーガーで簡単にお昼を済ませた。

ちなみに、イルカショーでは、はしゃぎすぎて「落ち着け！」って怒られたくらい。

自分だつてゴマファザラシの水槽の前に貼り付いて離れなかつたくせに。

「ナツ、イルカに触りたくない？」

「触りたい！」

ハンバーガーを食べながら秋津が微笑む。

「じゃあこのあと行こう」

「うん。ここイルカに触れるところとかあるんだね」

「ああ。でもイルカが来てくれなきゃ触れないんだけどな」

「え、じゃあ来なかつたら…」

「また今度、かな？」

えー！と不満の声を上げて膨れる。

そんな私を見て笑っていた秋津は、ふいに真剣になって「俺はもう1回来てもいいけどな」と呟いた。

そうだね、と相づちを打ちながら、ポテトをつまむ。熱いポテトに冷たいケチャップが絶妙に合う。

それは、どういう意味なんだろう。

私ともう1回来たい？それとも、単純に水族館に遊びに来たいだけ？

飲み込んだポテトが喉の奥でちょっと引っかかった。

そして、結果的にイルカには触れなかった。

…2時間粘ったけど、無理！

近づいてくるには来るんだけど、触れる距離までは来てくれない！私、もてあそばれてた…。

その代わりに、小さなクジラには触れた。

すべすべしてるけど、結構硬い。

水族館の人は『濡れた茄子』って言ってたけど、まさにそをんなかんじかな？

とりあえずクジラ触れたからよしとするか。

隣で秋津も不思議そうな顔をしている。

私の視線に気づくと、「なんともいえない感触」と首を傾げた。

あ、今ちよつとかわいかったかも。

今日だけは笑顔もびっくりした顔も、ゴマファザラシにニヤける顔も、独り占め。

幸せだな。涙が出そう。

こんなにいろんな顔を知ってるのに、まだ友達なんだね…。

水槽に映る自分たちの姿を見たら、まるでカップルみたいで切なくなつた。

日が暮れてきた頃、帰る前に寄つたお土産屋さんで、なんとなく一緒にストラップを買って、なんとなくその場で付け替えた。それぞれの携帯に、青とピンクのイルカが揺れる。

明日学校でたぶん春花につっこまれるけど、家に帰ればフユにも訊かれそうだけど、それさえもちよつと楽しみかも。

閑話 水族館（後書き）

なんだか最後が切なくなってしまった…。
今度は遊園地のお話を書けたらいいなと思います。

第21話

あいかわらず、橋本雪枝からの行為は続いていた。その内容がやら細かい。

机の中にミミズが入っている（小学生か！）、朝教室に来たら机がなかったり（隣のクラスにあった）、全クラスの黒板に大きく名前が書かれていたり（24クラス分）などなど。

よくこんな面倒なこと続けてるよね、と春花が言った。彼女の今日のお弁当はコンビニのおにぎりらしい。ぶつぶつ文句を言いながらも、ビニールを丁寧に剥がしてから一口かぶりつく。

屋上は暖かい。

私もフユ手作りのお弁当を広げてスプーンを取り出した。今日はオムライス！！このために午前の授業を乗り切ったと言っても過言ではないかも！

「ほんと飽きないわねあの子！そんなにナツがいいのかな？」

「え、失礼じゃない今の？」

「まあまあ。でも、きつともう好きじゃないでしょうね。ナツに何かしなきゃっていう思いの方が強いような気がするけど」

「かなあ」

言葉を濁した私の顔に春花の顔が近づく。

目を開いた私をじっと見つめたあと、うーんと唸ってまたおにぎりにかぶりつく。

「おかしい、私？」

「いや、おかしくは…ない？」

「訊かれても困るよ」

「今も、毎日秋津と学校来てるんでしょ？」

「そうだけど」

そう、秋津は飽きもせず毎朝7時半にうちのチャイムを鳴らす。この頃はフユとも意気投合してきて、すっかりなつかれてる。

毎日2人で教室に入るからクラス内でやや噂になりつつあるのが、今の問題。一度、噂になったら迷惑だから、と泣きついたけど、「いいじゃん？」とおどけて返されてしまった。

「ナツは俺と噂になるのが迷惑？」って訊かれて、あれ以上交渉できなかつた！

私は…噂になったら…ちょっと喜んじゃうかもだから…！

春花は最後のおにぎりのかけらをぽいっと口の中に放り込むと、もう一度うーんと唸る。

「その割には疲れてる」

「その割にはって、どの割？」

「好きな人と毎日通ってる割には、よー！」

「あ、うんそれは…」

そう言われて、少しだけ頬が熱くなった。

「だけど、なんか疲れてる」

「そう？」

「うん。大丈夫？彼女からの嫌がらせ、思ったより長いわね。何かあったら言ってよ？私でも秋津でもいいから」

そう言って春花は両手を上げ、くーっと伸びをした。と、突然足音がして、続いて長身の男性が扉からひよこっつと顔を出した。

秋津！

「俺も昼食べていい？」

「も、もちろん！」

あ。即答した私を見て、春花がニヤニヤする。

アタックしろとか言わないのはいいけど、ただニヤつきながら見守られるのも嫌なんですけど！

ま、でもなんだかんだ、お昼の時間が一番幸せ。

橋本さんは何もしてこないし、春花とたまにこうして秋津も一緒にごはんを食べる。

いつか、ね。

橋本さんからの嫌がらせなしに心穏やかにごはん食べたいなー。秋津の分のお弁当とか、作っちゃったりしてさ！

「あ、そうだなッ」

「ん？」

3口でメロンパン半分を平らげて、秋津がこっちを見た。やっぱり秋津ほどネックウオーマーが似合う人はいないと思うなー！グレーかっこいい。

「明日…話したいことがあるから、放課後残って？」

「わかっ…た。オーケー！」

話したいこと？何だろう？
いいことかな？

それにしてもやっぱり、フユのオムライスはおいしかった。

第21話（後書き）

いつもありがとうございます！

明日はちよっと更新が難しそうなのですが、また覗いてください

第22話

6限目の終わりを知らせるチャイムがなって、クラスの男子が歓声を上げた。

終わったー！

最後の授業は英語？。英語は嫌いじゃないけど、ややわからなくなりつつある…。高校英語って、中学と違って本当に覚えることが多い！

頭パンクしそうだよ！

英語の先生が帰ると同時に担任の先生が教室に入ってきて、パンパンと手を2回打った。

「ホームルーム始めるよ？」

うちの先生ホームルーム始めるの早いんだよなー。先生も6限は授業をしているはずなのに、絶対に6限目の先生とすれ違うように教室に入ってくるんだよね。どうやってるんだろっ…すごい。

しかもホームルームが終わるのも早い。実は結婚していて毎日子どもを迎えに行くためとか、恋人のため（もしかして学生！？）なんという噂があるけど、今のところ『先生自身が早く帰りたいから』という仮説が一番支持されてる。

確かに、あの先生ならありうる…。

意外と面倒くさがりで、アバウトだし。

たぶん朝の小テストの統計掲示してないの、うちのクラスだけだと思っ。朝テストがボロボロな人は喜んでるけど。

今日も必要事項をだけをテキパキ伝えたと、うちのクラスは解散になった。

「ナツ、待ってて」

掃除のため机を教室の後ろに移動させていると、秋津がやってきてこそっと耳打ちされる。

うんと頷いてから、慌てて「図書館にいる」と付け足した。それを聞いて、教室掃除当番の秋津は右手を振ってホウキを取りに行く。

話ってなんだろう。

橋本さんについてだってことは確実だけど…。

もしかして何かされたのかな？

あの日からも標的は私のままだけだったから、ちょっと安心してたのに…。

机を下げ終わると私は荷物を持って教室を出た。

春花は用事があるらしくて、さっさと帰っちゃったし、私は本当に一人で図書館に行く。

図書館って、いつも埃っぽい。

春花はそれが少し苦手らしいけど（その割にはよく行ってる）、私は好き。本に囲まれるとそれだけでどこかに行けそうだし、図書館ある本は新品のものとは違って、独特のにおいがする。荘厳なようだけど、でも誰かをその領域から外すことはない。そんなかんじ？

私は一番奥の読書スペースまで歩いて行った。

どのクラスもまだホームルームが終わっていないみたいで、スペースには誰もいない。

途中で『今月のオススメ』が置いてあるラックに立ち寄って適当に1冊持っていった。

今話題のライトノベル。こう見えて、私結構本読むの好きなんだから！

ジャンルもあんまり問わないから、フユが借りたり買ってくる本も読んだりする。

熱中すぎて人の話が耳に入らなくて怒られることもあるけど、1週間に1冊くらいは読むようにしてる。

「おまたせ？」

どのくらい時間が経ったのかな？

声をかけられてハッと顔を上げると、秋津が少し困ったように笑っていた。気づけば手元の本はもう半分を過ぎている。

秋津が「？」を付けたのも、そのせいかな？
だって確かに待ってはいなかったし。

秋津は私の向かいに座り、同じように荷物を下ろして彼の隣の席に置いた。それから中に手を入れ、何かをこそこそと探りだす。

夕日が入ってきて、眩しい。

秋津の頬も少しオレンジ色になっていた。

「これ」

見とれかけていた私を、彼の声が現実に戻す。ちえっ、もうちよっと見ていたかったのに！

秋津が差し出したのは1通の手紙だった。

真っ白な封筒には何も書かれていない。

「これ…何？」

「橋本からの手紙。机の中に入ってた」

橋本という名前を聞いたとたん、胸がズキンと痛んだ。

「読んで。どうしようかと思ったけど、ナツにも読んでほしい」

秋津の真剣な声に、躊躇っていた手を伸ばして封筒に触れた。

第22話(後書き)

いつもありがとうございます！

今日も更新できました！

明日はいよいよ…ふふふ

第23話(前書き)

ちよこつと編集しました。

第23話

『桐野先輩が好きな貴方へ』

こんにちは。もうご存じかと思いますが、私は1年の橋本雪枝とい
います。

単刀直入に言うと、私は桐野先輩が好きです。

私がお先輩にしてきたこともあなたなら知っているでしょう。

けど、決して嫌がらせなんかじゃない。あなたは以前、「俺なら嬉
しくない」とか何とかおっしゃっていましたよね。

あのおときは思わず言葉に詰まっしてしまいましたが、じっくり時間を
かけて考えてみると、やはり私のやり方は間違っていないと感じま
した。

どんな方法でもいいのです。

先輩の意識が私に向くのであれば、それがどんな感情だとしても、
私の喜びにしかならない。そのことを強く強く理解しました。

今の私にあなたは邪魔者でしかありません。だって、あなたがいる
限り、先輩は私のことを見てくれない。

だから思ったの。

桐野先輩はとても忍耐強いし、きっとこの先私が何かしたとしても
動じない。

じゃあ、あなたなら？

先輩は友だちを大事にする人だと聞いています。あなたが友だち以上だとしても、それは変わらないこと。

なら、あなたでいいよね？

桐野先輩に私だけを見てほしいの。

そのために、協力してもらえたら嬉しいわ。

橋本雪枝』

便箋4枚に渡って綴られたその言葉は、私を痛めつけるのに十分だった。

手紙を持つ指先が震えて、全身から嫌な汗が流れ出す。どうしようでしょう。

一番恐れていたことが現実になる。

簡単に言うと、今の手紙で橋本雪枝は『次の標的は秋津だ』って宣言してるってことでもいいんだよね？

嫌だ、そんなのダメ！

私は手紙から目を離せずにいた。明らかかな意思を持って綴られた言葉に息を飲む。

無意識のうちに紙を持った手に力が入って、端が少し折れた。

「ナツ：大丈夫か？」

目に見える動揺に驚いて、秋津が顔を覗き込んできた。うん、と頷いたけど、たぶん私青い顔してる。秋津の心配そうな顔が目に入っ

て、どうしようもなく申し訳ない気持ち溢れた。

あ、ヤバい。泣きそう…かも。

うう、嫌だ。学校で、しかも秋津の前で泣きたくはない。

それに…私が泣くのはフェアじゃないよね…。

だって、これから辛い目に会う可能性があるのは秋津だから。

「大丈夫。それより…秋津ごめん。私のせいで、秋津も何かされるかもしれない。っていうかこの手紙だと、確定だよね」

あはは、と笑ってみたけど、ちょっと不自然になっちゃったかも。

秋津は黙って何も言わない。

「…」
「…」

う、気まずい…。10秒ほどして耐えきれなくなった私は、荷物の中からハンカチを掴むと、勢いよく立ち上がった。

「と、トイレ行ってくる!!」

くるりと背を向けた向こうでイスを動かす音がする。秋津も動いたような気配がした。
と、そのとき。

右手を強く引かれる感触がした。

「…っ!?!」

何？と訊く前に、そのままぐいつと引つ張られる。前に行きかけていたところで急に後ろに引かれて、私の体は軽くバランスを崩した。

秋津？

そうだ、今私の背後にいるのは彼しかいない。

突然のことでどうしていいか分からず、腕抜けるかもなんて考えて、脱臼は痛いんだよねなんて想像を膨らませた。

そして気づいたときには彼の腕の中。

秋津の中にすっぽりと収まって、ぎゅっと抱き締められた。

「泣けよ、泣いていいから」

「え？」

「今にも泣きそうな顔して。どうせトイレ行って泣くつもりだったんだろ？」

「そ、そんなことないよ……」

「嘘。そんなところ行って泣くくらいなら、ここで泣け。まだ誰もいないから」

秋津が私の頭を撫でながら、「俺がいるから」と優しく囁いた。その手が温かくて……大きくて。ここはなんて安心できるんだろう。

もう……限界。

堰を切ったように涙が溢れた。

抑えようとしていた声も次第にコントロールが効かなくなって、ついに嗚咽が漏れる。

「なあナツ……。俺ってそんなに頼りない？」

「そ……んなこと……ない……です」

「俺ってそんなに弱く見える？」

「うっ…ん」

「じゃあ、信じてよ。あんな辛い顔すんなよ。甘えてくればいいんだ。いつかきつと無くなるからそれまで一緒に頑張ろうね、って言うてくれればそれでいい。1人で考え込まなくていい」

頭の上で聞こえる低い声に、またさらに涙がこぼれた。

「ナツ」

「…は…いい」

「ナツ」

「うん…」

「夏花」

「…いる…よ」

何度も私の名前を呼んで、最後に秋津は大きく深呼吸してから、私を強く抱き締めた。

ナツ、橋本のことなんか気にするなよ？と言って、ゆっくり頭を撫でる。

「橋本の声じゃなくて。」

…俺の声だけを聴いていて「」

第23話(後書き)

いつもありがとうございます

つ、ついにいいかんじになってきました…！

長かった…！

第24話

秋津の大きな手が何度も背中をさする。

その暖かさに安心して、私は子どもみたいに泣きじゃくった。制服濡らしちゃうかもと思うのに、涙はあとからあとからこぼれてきて、止められない。

最初は無言でさすっていた秋津も、からかっているのかだんだん「おう、泣け泣け」とか「まだいけるぞ」とか、訳のわからないことを呟き始める。

あやしているような行動と、唆している口調が合っていないかと思わず笑いがこみ上げてきた。

「ナツ、笑ってる?」

「うん。だつて、変なこと言うから」

「お前こそ変な声」

笑ってぎゅっと抱きしめる。

男の人って、やっぱ大きいなあ。

広い胸に顔を埋めながら思う。

春花も桜も雪枝も小柄だし、修学旅行で告白された子で私より身長が大きい子はいなかったし。

それに、なんかしつかり?がっちり?

抱きしめたとき、春花みたいにふわっと柔らかくない。それに、シヤンプーのおいもしないかも。あ、でも石鹸のかおりがする…。

「なんでにおいを嗅ぐのかな?」

顔を埋めたままでくんくんにおいを嗅ぐ私に気づいて、秋津は私の頭をぱしんと叩いた。

「だ、だって…石鹸のおいがした…」

「石鹸？そうか？」

彼は少し眉を寄せて自分の腕の辺りに鼻を近づける。その姿がかわいい。

「そんなにしないけど。まあ、いいや。とりあえず、落ち着いた？」

「うん…ありがとう」

いいえ、と言ってから秋津はそつと腕を離しかけた。暖かさが離れていく感覚に、少し寂しさを感じる。

もうちょっとって言ったら、秋津はどうする？

いや、ここはチキンになってないで自分から抱きついてみる！？

…無理だ。それはまだハードルが高い…。

結局何も言えないまま、秋津の腕は外されて。

と思いきや、また背中に回されてそつと抱きしめられた。

「やっぱり…もうちょっと。掃除当番と図書委員が来るまで。ダメ？」

ダメって…言えるわけないじゃん！

何も言っていないのに、彼は満足したみたいに私の髪を撫でた。ふわりと石鹸のおいがする。

ドクドクと鳴り響く心臓の音が秋津に聞こえないか焦る。

今になって体が熱くなってきた。

そ、そうだ……。冷静に考えたら、これっておかしな状況だよね！？

泣くときに誰かに抱きしめられることなんて、めったにない。逆に抱きしめて慰めてきたし。

なのにその相手が同じ学校の男子とか、かなりありえない。しかも同じ学校だけでなく、同じ学年、同じクラスだなんて！！

なんの拷問ー！？

もう、明日からどんな顔してればいいの？

そんなことを知るはずもない秋津は私の首筋に顔を寄せて、エネルギーチャージだーなんて呟いた。

いや、マジで吸いとられてる気がする。

下手したら魂まで持っていかれそうだし。

少し身をよじった、そのとき。

ガラツと音がして扉が開く音が響き、続いてガヤガヤ掃除当番らしき人たちが入ってくる。

そのときの2人の離れ方はたぶん超高速だった。

秋津は一瞬で手を離してイスに座る。

私もまた不自然にラックの本を手を取った。

ああ！びっくりした！

まさかこのタイミングだとは！

まだ、背中とか頭に秋津の温もりが残ってる。

第24話（後書き）

なかなか進まないフタリ…
いつも私の妄想に付き合ってください、ありがとうございます！

第25話（前書き）

久々のフユ登場。場面は桐野家です。

第25話

「ふうん。慰められたんだ？」

「う、うん…」

「秋津の兄ちゃん結構やるんだねー」

「掃除の人が来たときは超高速で離れたけどね」

「ま、そこはね。まだ高校生ですから」

あんだだつて中学生でしょ、と思う。

フユは私のベッドに腰かけて、足をぶらぶらさせながらコーヒーをこぐりと飲んだ。

角砂糖を3つ入れた、激甘コーヒー。

学校から帰ってきた私は、家族から見ても何かあったと分かるくらいに挙動不審だったらしい。

フユには「あれだけお米が好きなねえちゃんか、ごはんでお米以外から手を付けたの、初めて見た」と言われた。

弟よ、それは学校とかで言っくんじゃないぞ。

私だつてたまにはおかずから食べ始めることもあるぞ。

「ところでね」

「何？」

「ねえちゃんつて、秋津の兄ちゃんのコト、好きなんですよ」

思わぬ流れにコーヒーを吹き出しそうになった。

今白米の話してたじゃん！

ていうか、なんでそれ知ってるの！？

言っていないはずだけど私！！

え、もしかして、言っちゃったりしてた？
てことは、てことはだよ。

毎朝私がバタバタ支度してる間に、玄関の外でのんびり秋津と談笑してるフユが、彼にこのことしゃべってる、なんてことないでしょうね？

「大丈夫、バラしたりしてないから。本当にねえちゃん分かりやすいねー！全部顔に出てたよ？この調子じゃ、もう秋津の兄ちゃん知ってるんじゃない？」

フユはクスクス笑ってそう言うと、ベッドから立ち上がって机の方に歩く。

「秋津は知らないはず…。頑張つて顔に出さないようにしてるから。つて、ちよつと！机の中…見ないでよ？」

「はいはい、分かってますつて。あ、この本面白そう。借りていい？」

今日借りてきたミステリーの本を手にとって、フユは床に座る私の側にしゃがんだ。

「いいよ、もう読んじゃったから。今日借りてきたとこだし、返却はまだまだだから、ゆっくり読んでも大丈夫」

「え？もう読んだの？あいかわらず速っ」

フユは口笛をヒューっと鳴らして、本をバラバラとめくった。

「今日借りてきたつてことは、あの熱い抱擁の後ということですかね」

「…フ、フユっ！」

近くにあった黄緑色のクッションを拾って投げつけたけど、フユはニヤニヤしたままさっと避けてしまった。

「まあまあ。嘘じゃないからね？それにしてもそのクッション、いつ見ても空豆にしか見えない」

「空豆じゃないから。どっちかっていうと、枝豆ですから」

「どっちも変わんないよ」

フユは手を伸ばして豆クッションを掴むと、ぽいっとベッドの方向に投げた。

ぽふっと音がして、布団の上に着地する

「ナイスコントロール」

「この狭い部屋だもん、そりゃうまくいくでしょ」

「…ねえちゃん、今日は妙に突っかかるね？」

当たり前。フユがからかうのが悪い。

私はふんつと横を向いてコーヒーを飲み干した。

「じゃあ、ありがたく借りておくれ？」

そう言って立ち上がると、フユは自分と私のカップを両手に持って、本を右の脇に挟んだ。

「ありがとう」

「ん」

「あ、そうそう」

ドアを開きかけたところでフユが振り返る。

「僕は応援してるから。ねえちゃんと秋津の兄ちゃんのこと」

「…なっ」

「だって、もし2人が結婚したら、僕の兄ちゃんになるんでしょ？
楽しみだなあ」

「楽しみって…」

「僕のためにもがんばってね？」

僕のためって…。

時々ほんとに腹黒いよね…。

ドアがぱたんと閉まって、私はため息をついた。

第25話（後書き）

フユがいつぱい出てきました！

本当はもっと出てきてほしいです。

橋本さんより登場回数少ない…かも？

短編を載せました！

そちらも覗いてもらえたら嬉しいです！

第26話

「ねえ、ナツ何かあったの？ってか何かあったんでしょ。朝から拳動不審すぎるから」

図書館での一件があった次の日の放課後、春花に呼び出された私は今川家にお邪魔している。

春花のお家は一戸建てで築20年らしいけど、中はリフォームされているので、新築みたいにきれい。

上下グレーのスウェットという部屋着に着替えた春花は、また少し伸びた髪の毛を手早くポニーテールにした。

「ナツ？」

私が返事をしないから、不審に思ったみたい。

聞いている、聞いてますって。

でも、何て言えばいいの？

「昨日ねー図書館で秋津に抱き締められちゃった！あは」なんて…とてもじゃないけど言えない…。

その点、我が弟は恐ろしい。

「もしかして、ぎゅっ！とかされちゃったの？」って核心をついた質問をしてきた。でも、それなら頷いて答えられたけど…。

「あの…ですね」

「どうせ秋津絡みでしょ？」

「……………ハイ」

「だと思った。今日いろいろ行動が不自然すぎて、なんか面白かつ

たわよ」

そう言つて春花がくすくす笑う。

ああ、スウェットでもかわいいな…。

そして部屋がきれい…！！

基本的にはオレンジで統一された部屋は、なんとも女子っぽい。ベッドカバーなんか花柄だし、カーテンはオレンジのグラデーションで、下の方に白いレースがついている。

私は春花に向き合つてじつと目を合わせた。

「ねえ、私そんなに変なことしてた？」

「うーん、変なことっていうか…」

そうね、と春花が呟く。

「いくつがあるのよ。例えば、

case 1

「秋津、教科書36ページ読んで」

「はい。Mr. White who works」

「よし、次桐野！」

「…」

「桐野？秋津の次のところから読んで」

「あ、は、はい！秋津の次…えーと…。秋津の次…」

「37ページ1行目から」

「あ、はい。秋津の次ですね！」

case 2

「ナツ、今日暇？」

「うん」

「そろそろ秋物だと寒いから、冬物の服買いに行きたいんだけど、付き合って?」

「え、秋?」

「そう。秋物だと寒いから」

「あ、ああ。服の話ね」

「ずっと服の話だったけど…」

case 3

「ナツ!」

「あ、ああ秋津、おはよう」

「『あ』多くね?おはよう、ってかもう昼だけど」

「そ、そう!そうだったね!はは、うっかり!」

「まあいいや。なあ今日の放課後…」

「放課後!?き、今日は春花と買い物だし!」

「あ、いや…俺じゃなくて…。世界史の門真^{かどま}先生が、プリント持って来るよう係に伝えてって言ってたから…」

case 4…」

「ちよつと待ったあ!もういいから!」

さすがに耐えきれなくて、春花を遮る。

オレンジジュースをぐいっと煽って、彼女は笑った。

「ねえ、告白しないの?」

「え、告白?」

「そう、告白。だって、好きなんでしょ?」

「うん。でも、勇気ないし…」

妙に乙女っぽいね、なんて言われる。

どーせ女子にモテますよーだ。

「勇気なんかその場で出るわよ。とりあえずアタックしなさい。ナツが意外と初で、先生ちよつと悲しいわ」

「そ、その場で!？」

「そうよ。見てていじらしい!冬休みに入ったらまた会えなくなるんだから」

「…」

春花先生、厳しいんですけど。

こうなったら約束するまで返してもらえないんだよね。

第26話（後書き）

更新が乱れぎみですみません！

そしてなかなか進展せずにすみません！

な、なんとか次は秋津を出したい…

第27話

『好きですっ!』

普通に言っただつもりなのに、案外大きい声が出て恥ずかしい。

放課後の図書館、中にいるのは秋津と私だけ。

もちろん今発言したのは私だから、相手は秋津ということになる。

『ナツ…』

ひどく驚いた様子の秋津は、たつぷり10秒程黙った後で、柔らかな微笑みを浮かべて。

『俺も』

と言った。

――

「…さ…よ」

え?なにになに?

「…さだよ!」

…声が聞こえる。誰?秋津?

「朝だつてば起きろ!」

「わあ!」

フユが耳元で怒鳴って、その声の大きさに驚いて私は目を覚ました。
「まったく、何回呼んだと思ってるんだか。早く着替えなよ、ねえちやん。秋津の兄ちゃん来るよ？」

お玉を持ってエプロンをしたフユは、ぶつぶつ文句を言いながら部屋を出て行った。
携帯を開いて確認すると、朝7時ピッタリ。
いつもより30分も寝坊してしまった。

とりあえず制服に着替えながら、思い浮かぶのは図書館のアレ。幸せだった。

さっきのは…やっぱり夢かあ。
だよな、だって図書館に誰もいないとかがありえないもん。普通は図書委員とか他に勉強しに来たりしてる人もいるし。

それにしても、夢の中の秋津かつこよかったなあ。
前髪がちよつと目にかかって、でもその奥の瞳は優しく、頬がちよつぱり赤くて。

いや、現実の秋津もかつこいいけどね？

まだ余韻に浸りつつ着替えを終えると、今日の授業に必要な教科書、ノート、プリントをがさがさっとまとめてカバンに詰め、下に降りた。

朝迎えに来てもらうようになってから2週間くらい。橋本さんからの細かな嫌がらせは、やっぱり続いている。私自身飽きたというか…
疲れた。

いちいち反応すると面倒だし、今やクラスの人ですら私のイスや机

の画ビヨウを取っておいてくれるようになった。

ちなみに秋津への嫌がらせも、私とほぼ同じ内容で繰り返してきている。橋本さんからの手紙からでは『協力して』ってあったけど、とりあえず…そんなにひどい嫌がらせじゃなくてよかった。秋津はミミズも平気みたいだし…。

「ごめんな兄ちゃん、ねえちゃんたら寝坊してるから」

玄関の外で声が聞こえる。

またフユが話してるみたい。

「大丈夫か？たぶん疲れてるんだろ」

「かなあ、なんか最近挙動不審だけど」

「挙動不審？」

「うん。特にこの前…」

「だあああー！ー！」

ちよつと待てよ！

フユ！！何てことを！

私は慌てフユと秋津の間に滑り込んで、

「お、おはよう！寝坊しちゃった…はは」

と秋津に笑いかけ、

(何やってんのアンタ！)

という形相でフユを睨み付けた。

当の本人は「してやったり」みたいな顔をしている。

「お、おはよう」

振り向いたら、秋津がビククリした顔でこっちを見ていた。

第27話（後書き）

夢って怖いですよね。

特に嫌いなのは、食べたかったものが食べられずに終わる夢……。

第28話

結局なんとなくごまかして、私は家を出た。

フユのせいで慌てて出たから、朝ごはん用に持って行くつもりだったパンを忘れた…。

仕方ないから、途中でコンビニ寄らせてもらおうかな…。朝ごはんはさすがにキツイ。

毎朝学校に行く内に、いつの間にか秋津は前じゃなくて隣を歩くのが普通になった。けど、これといって会話もしない。えっと、全くしないわけじゃなくて、話題があればするけど。ホラ、宿題のこととか。

今日も軽快に歩く秋津の横顔をチラッと見る。

これが私の朝の習慣。

ちょっとした元気のチャージ。

でも、今日はお願いがあるので口を開いた。

「ね、今日途中でコンビニ寄っていい？」

「ああ。おやつ？」

「違うっ！…寝坊したから朝ごはん食べ損ねて。で、持って行くことと思ってたパンも忘れてきちゃったから、ちょっとその分の調達。

てことで、ゆっくり来て！」

ちょうどコンビニが見えて、私は駆け出した。

ダッシュして買ってくれば、秋津がコンビニに差しかかる頃に間に合うかも！

定番のたまごサンドをゲットして外に出ると、秋津はもう立っ

た。あ、そういえば、今日はマフラーしてるんだね。

赤に緑のラインが入ったマフラーを巻いて、彼が手招きする。

「行くぞー」

「うん！」

私が並ぶと同時に、また歩き出した。

「なあ」

「何？」

「ナツ、毎朝俺の横顔盗み見てない？」

げっ、バレてた！

私としてはうまくやってた方なんですけど…。

「無言つてことは正解でいいんだよな？」

「いやいやいやそんなことないですから」

「まあ、いいけど…」

え、いいの？

ちよっとビックリして秋津を見つめた。

前を向いていた秋津がは私の視線に気づくと、フイと顔を反らした。

「いいけど、恥ずかしいからあんま見んなよ」

あ、ホントだ。顔赤い。

それにしても「恥ずかしい」なんて、授業中でもクラス会でもいつも堂々としてる彼には珍しい。

あ、言い忘れてたけど秋津はクラス委員をやってる。文化祭とかで

クラスをまとめるアレです。

「だーから！見んなって！」

反らしていた顔を戻した瞬間に私と目が合う。

秋津は何度もやめろ、とか見るな！って言うてから、早足で歩き出した。

ちよっとかわいいかも。

家出中の猫を追いかけるみたいに、私は恥ずかしがる秋津を追いかけた。

走って追い付いて、袖を軽く引つ張る。

にこつと笑っても、また顔を見る。

「くっ…」

少しだけ悔しそうな顔をした秋津は、足を止めたかと思うと次の瞬間、意地悪い笑みを浮かべた。

…ヤバイ。

朝の住宅街。

ちらほらと制服姿の学生、スーツのおじさんやきれいなお姉さんが行き交う中で、秋津は立ち止まる。続いて立ち止まった私を見る目が真剣そのもので、ちよっ…いや、かなり怯む…。

「そんなに俺の顔が見たい？」

「いや、そんなことないです…」

「別に見てくれていいから」

「さっきのは嘘…えっと嘘じゃないんだけど…。その出来心って言

うんですか？あの…つまり、ごめんなさい」「
「ナツが謝らなくていいよ。見ただけ見ればいい。ほら、どうぞ
？」

明らかに黒い光を光らせた瞳で、秋津が顔を近づけてくる。

ううっ…イケメン。

いや、そんなこと思ってる場合じゃない！
こうなれば…

「お、お先に！」

耐えきれなくなつて、私は逃げ出した。

心臓がドクドクと派手な音を立てる。

朝から秋津の顔ドアップなんて、体に悪すぎる…。衝撃的すぎます
…。

しばらく早足で歩いてから後ろをそつと見ると、秋津は例の微笑み
を浮かべながら歩いてた。

第28話（後書き）

意地悪な秋津はいいかんじです。

本当はもっと意地悪くさせたいですが…！

第29話(前書き)

短い上、少し中途半端ですみません…。

第29話

重大なお知らせがあるって言われたとき、大抵はいいことじゃない気がする。

今回もそうだった。

しかも、その報告…聞きたくなかった。

「橋本雪枝に告白されました」

「…」

「橋本…」

「聞こえた!」「聞こえたわよ!」

私と春花は同時に叫んで、秋津を睨み付けた。

告白!?!何で!?

橋本さんにとって秋津は嫌がらせをする対象者じゃなかったの?

「秋津は嫌がらせの対象じゃなかったの?」

あ、春花も同じことを思ってる。

秋津は困惑した顔で私たちの顔を交互に見た。

「俺だつて分かんねえよ」

「…それ、いつ?」

「告白?昨日の放課後。用事があって職員室に行った帰りに会って、そのままそこで」

「え、職員室の前で?」

「そう、職員室の前で」

春花がチツと舌打ちする。

職員室つて言ったら放課後もいろんな人が行き来する場所なのに…。
すごいなあ。

…感心してる場合じゃないって。

何なの橋本さん！いや、この際橋本と呼び捨てで呼ばせてもらうけど、ありえない！？

ついこの前まで私が好きって言ったのに変わり身速すぎるでしょ！私を好きじゃなくなったことは嬉しいけど、よりによって秋津！？

秋津、お願いだからなびかないで！

りんごほっぺに惑わされないで…！

「で、どうしたの？」

私が1人脳内で焦っているうちに、春花がどんどん質問を重ねる。ちなみに今はもちろん放課後です。場所はお馴染みの屋上。かなり寒いけど、そこは我慢。

「断った！当たり前だろ」

その答えにホッとする。

屋上の柵にもたれかかってこちらを見ていた秋津は、少しいライラした様子で体を回転させて、住宅街を見下ろした。

第29話（後書き）

あまりに半端な終わり方になってしまったので、もう少ししたらまた1話更新します！

橋本雪枝の問題にいい加減決着をつけたいです……。彼女のやることが奇怪すぎて、もはやミステリーなかんじ……。

第30話

全く橋本雪枝は何を考えてるんだろう。
いやむしろ、何も考えてないのかも…。
想いのまま突っ走りそうだし。

「私に1ついい提案があるんだけど」

なんとなく重苦しい空気になりかけていたとき、春花が腕を組んで言った。

小柄な春花が腕を組んで仁王立ちすると、何か組体操のピラミッドで一番上に乗る子みたいになって、微笑ましい。

私のニヤついた顔に気づいて、「何笑ってんのよ」と春花がちよつと怒った。

秋津もこちらに体を向けて、再び柵にもたれかかる。

「提案つてどんな？」

「まあまあナツ、今から言うから。そう焦らない」

焦ってないよ！延ばしてるのはあんたでしょ。

と、喉まで出かかったけど…言わなかった。

あとで毒吐かれるの嫌だし。

「いい？以前、橋本はナツが好きだった。で、今はどうも秋津が好きらしいと。ここまではいいよね？」

「ああ」「うん」

「彼女がここまで執着するのは何でか考えてみたの」

ほほう、なるほど。

さすが頭がいい人は考えることが違う…。
私も秋津もうんうんと頷いた。

「それはね、2人に決定打がないからよ！」

「…」「…決定打？」

「そう。例えば、秋津は元カノが忘れられなさすぎて恋愛できない
体質だ、とか」

「オイ、例酷いな」

「例えだから。あくまで例えよ。つまりは、そういう『じゃあ無理
か…』って思わせるような何かがないからいけないの」

第30話（後書き）

2つ目です。

第31話(前書き)

本編について、少しお知らせがあります。

詳しくは活動報告の『本編の長さについて』をご覧ください！

第31話

『じゃあ無理か…』って思わせるようなこと？
それって意外と簡単にできるかも。
もちろん、相手の同意が必要だけど。

私は春花に向き合って、その細い肩をガシッと掴んだ。

「春花！私と付き合ってるっていつこ」

「却下」

「はや！」

「私そういう趣味ないから。でも、ナツにしては、いい線いってるかな？」

ナツにしては、って！

それに私だってそんな趣味ない！そういう風にしちゃえば橋本も納得するかと思ってる…。

「まあまあ。つまりね」

「つまり…？」

「秋津もナツも、恋人を作っちゃえばいいのよ！」

「…」

あ、ヤバイ。

一瞬で屋上が凍りついた…。

秋津が好きな私はともかく、彼がどんな反応をしているか見るのが怖い。黙ったままの秋津もイケメンだけど、いつもより迫力があって、雰囲気違うかも。

「どっつ？どっつナツ？」

やけに嬉しそうに春花が訊いてくる。
ひゅうつと冬の風が吹いて春花の髪が軽くなびいた。

そこ、私に振るの…？

どっつて訊かれても困る…けど。

私は秋津が好きなんだってば！
でも仕方ないから、

「それも…ありだ、ね？」

うん、結構無難な答えだと思う。

でもたぶん顔、引きつってた。

それに「ね」の声が裏返ってたけど、気づかれた？

「秋津は？」

私の微妙な返答に少し呆れ顔をした春花は、柵にもたれている秋津の方を振り返って答えを求めた。
ちよっと困った顔の秋津。何か言いかけて、また口を閉じる。

「うーん…」

「彼女、ほしくないの…？」

「いやーほしいっちゃんほしい」

「え、どっちななの？」

「ほしいです」

やっぱり秋津も春花に頭が上がらないんだ。
そう思ったらまた笑ってしまった。

第31話（後書き）

この時期に屋上って、絶対寒いですよね…。

第32話

『2人に恋人がいるって分かれば、ちょっとは納得するかもよ?』

春花はそう言ったけど、どうなのかなー。

でもいつもの嫌がらせにも反応してないし、そろそろ飽きるかな?

秋津と一緒に帰り道、特に会話もせず1人妄想に耽っていた私は、彼の「なあ」という呼びかけで現実に戻って来た。

「今川…怖かったな」

それには同意なので、うんうんと頷いておく。

そのとき「確かに彼女ほしいけど」という呟きも聞こえてしまった。

「ところでさ、ナツって彼氏いるの?」

のんびり夕焼けの空を見上げて歩いていて理解が数秒遅れる。それから、その質問に思わず立ち止まった。

あまりにも…その…直球!!

秋津は私が立ち止まったことに気づいてないまま数歩歩いてから、隣にいない私を探して振り返った。

「ナツ?」

「い、いません」

「うん、知ってる」

「は?」

知ってるって！

ナニソレわざと訊いたってこと？

今、結構勇気振り絞って言ったんだからね！

秋津はニヤリと笑って「おいで」と言った。

その余裕の笑みが悔しい…けど、帰らないわけにはいかないので、言われるまま彼の隣に並んだ。

「そ、いい子だね」

「子って！私175cm以上あるのに子って！」

「俺は185cm以上ある」

「自慢にならない！」

やっぱ185cmあるんだね。高っ！

て、違う違う！まったくもう…。

時々秋津はこうやって私をからかっては、意地悪な笑顔を見せる。

どうしようもないくらい…素敵な笑顔で！

第32話（後書き）

1日のユニークアクセスが初めて1000人を越えました!!

いつも覗いてくださるみなさん、ありがとうございます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8906x/>

声だけを聴いて

2011年11月29日00時55分発行